山　神　社　（大字四ツ谷九々明）

『新編会津風土記』に、

「山神社境内東西七間南北五間免除地村北二十間山麓にあり鎮座の年月詳ならず村民の持なり」

と記されている。大岩村・沢中村・鳥屋村三村の境内を開削したもので「此村に隷せる地なし」とあるように明神嶽山麓の狭隘な地に開村したのである。

当村は文化三年（一八〇六）当時戸数二戸だったが九戸あった時代もあると言われ、小集落ながらも独立村であった。村に神社は二社あって、延宝九年（一六八一）の『滝谷組拾五ケ村高反別古記』に「山之神社　山腰」とある石祠が羽佐間峠の中腹にある。これが祖先土着と同時に祭った社である。胄中沼入りからの移住者が祭った石祠があったが、後代に山神社を当村の神社とした。当村は木地挽を業とし、近年まであった二戸共に転住した。

第二節　寺　院

一、柳津地区

(一) 寺　院

寺とは仏像を安置し僧や尼が住んで仏道修行や仏事を行う建物で、中国ではもと外国の使臣を遇する役所の意であったのが、後漢の明帝の時白馬寺を建立してから寺院をも呼ぶようになった。寺院・精舎・伽藍・蘭若・梵刹ともいう（辞典）。

わが国において最初に建立された寺院は向原寺で、蘇我稲目が百済の聖明王が献じた仏像経論を向原の家に安置し、これを寺としたのが最初とされている。

飛鳥時代には、大和国・河内国・摂津国・伊予国・筑前国・豊前国・近江国・伊賀国・伊勢国・尾張国・三河国・上野国等近畿地方を中心に関東・中部・中国・四国地方に建立されたが、まだ全国一円には及んでいなかった。その多くは民族の長によって建てられその民族の幸福を祈願するもので、民族の長の生活地に建てられていた。

仏教伝来から大化改新（六四五）までは六十数ケ寺に過ぎなかったが国家の保護のもとに増加し、奈良時代には三六〇数ケ寺となり畿内だけでなく地方に及ぶようになった。

改新後寺院は国家管理に移され、一ケ国一ケ寺として国分寺（僧寺）・国分尼寺（尼寺）が建てられ、護国経典が読誦され国家鎮護の性格を帯び、中に護国寺と称されるものがあった。中世になると天皇制の衰頽とともに古代寺院は衰頽し、密教化したので、中央の寺院は貴族の信仰を独占し貴族からの寄進によって財力を豊富にし、大寺院は比類ないほどの大土地所有者となった。

古来、寺院における仏事は、国忌・御斎会・安居・大般若会・読

経悔過・仁王会・仏名会などで、天災地変を除く息災法や、息災増益のための尊星法や晴雨法なども修せられた。奈良朝や平安朝時代には、天下泰平・除災招福の鎮護国家の修法祈祷の仏事が盛んであった。また社会事業としては治病延命の施設も計られ、薬草や薬湯を施す施薬院・療病院・悲田院も設けられた。しかし各々所依の経典の教化を施したことはいうまでもない。

鎌倉期の新興の諸宗派は全国に浸透し、至る所に寺院が建立された。当時から檀家制度がとられ、寺院と武士と農民の関係は緊密化したが、近世初頭織豊政権の宗教政策によって、寺院のもつ軍事力や経済力を失い寺院の無力化が進行した。

江戸幕政はキリシタン禁制のために寺請制度（檀家制度）を強行し、封建社会の支配機構の一翼を担うことになった。しかし時代の推移と共に排仏論が台頭し、明治政府の行った神仏分離は廃仏毀釈に発展し寺院の廃合が行われた。

終戦後は、教派神道の進出や農地解放によって小作地の没収、地主の没落によって経済力が弱体化したが、祖先崇拝の国民性によって維持されている。

(二) 寺院名

寺名	山号	宗教	本尊	所在
円蔵寺	霊巌山	臨済宗		柳津
奥之院		臨済宗	明星天子	柳津
真光寺	恵日山	曹洞宗	釈迦如来	藤
月光寺	円満山	真言宗	大日如来	柳津
月光寺	医王山	曹洞宗	大日如来	野老沢
安穏寺	法流山	真言宗	薬師如来	麻生
正徳寺	多宝山	臨済宗	無量寿仏	小ノ川
西光寺	蓮寿山	曹洞宗	如意輪観音	猪ノ鼻
長蔵寺	高昌山	曹洞宗	釈迦如来	長倉
華蔵寺	月秋山	臨済宗	阿弥三尊仏	郷戸
光泉寺	寿命山	浄土宗	阿弥陀如来	大野
高林寺	塩水山	曹洞宗	地蔵菩薩	塩野
慶福寺	松厳山	曹洞宗	地蔵菩薩	軽井沢
西念寺	紫藤山	浄土真宗	阿弥陀如来	砂子原
神照寺	湯瀧山	浄土宗	阿弥陀如来	砂子原
真光寺	長花山	曹洞宗	十一面観音	胄中
円明寺	峯清山	曹洞宗	釈迦如来	大峯
正徳寺	田松山	浄土宗	阿弥陀如来	田代
猿沢寺	峯円山	曹洞宗	地蔵菩薩	牧沢
善応寺	巌前山	浄土宗	阿弥陀如来	四ツ谷

糸滝不動尊（大字柳津）

月光寺の裏、只見線の鉄橋をくぐって細い山道を辿ると、二階滝がある。谷あいの水が滝となって流れ落ちるところで、水量が常には少量なので遠くから眺めると、白い糸を垂らしたようにみえる。

糸滝不動本尊（柳津）

これが糸滝である。その滝の前の狭い平担地にこの不動尊が祭られてある。行者たちは修験者としての荒行に用いたものが多く、その苦行を偲ぶ教えと励ましのために、忿怒の不動尊を祭った。俗に滝不動という。こうした習わしから、ここにも不動尊が祭れ、長谷川美材氏の書かれた優麗な糸滝不動尊の掲額が、本尊とは対象的な達筆の文字に心うたれた。堂も真新しく、畳・祭具など不動信仰の人々によって寄進されて、陰うつな感じを与えない。表戸は蔀戸にしてあり、優雅な感じさえする。本尊は木彫彩色で通例の厳上に立ち左手に絹索、右手に宝剣を持ち火焔光背を添えてある。眼は輝き、歯も二本出牙した忿怒形である。脇侍に制吒迦、矜羯羅の二童子を随えている。崇敬者も毎月の三日の御縁日には参詣する人も多いのか、花も捧げられていたし、賽銭も多く播かれていた。善男善女の多いのはよろこばしいことである。霊験あらたかな不動尊である。

滝の落石右壁に不動尊が祭られている。滝不動尊で岩を削って石龕としその中に別に刻んだ不動尊（舟形光背）が祭ってある。いつの頃に創祀されたかは分明しない。

高　林　寺　（大字塩野）

塩水山　曹洞宗

本尊　地蔵菩薩（現在石像）

柳津から軽井沢への街道沿いの塩野地区のまん中で、道東の低地にある。ここから北東の山裾から塩水が湧き出たり、岩塩をとったりした歴史で塩野の地名がおこったが、その名に因んだため山号を塩水山としてあり、昔の会津の人々の塩への関心度を示している。寺は創立後に火災にあい全焼して、重要な仏像、什物その他を失っていて、確実な史料はみつからない。『新編会津風土記』に記してあるので、それによって縁記を記しておく。

この寺は天文八年（一五三九）に常陸国から来た僧北岩がはじめて開山した。その後村人と仏法を護持したが、元和元年（一六一五）に火災にかかり、すべてを失ってしまった。おそらくこのとき御本尊も災をうけられたと思う。しばらく無住であったが、いつのころにか良室という僧が来て、檀家と合議し寺と仏像を再興した。この寺もしばらくは続いていたが、戸数、信檀家少なく、無住時代が続

いたので、この寺も廃寺同様におとろえたのと、僅かの戸数で護持することが容易でなかった。慶安元年（一六四八）再建すると、その後は野沢組野沢原町にある常薬師末山となった。この寺の援助もあったと思われる。この時から曹洞宗に改宗されたと記されてある。

現在はこの古寺をこわし、集会所風の建物として、専ら集会用としている。石仏地蔵尊は寺地の一部に祭られ、いまも信仰を受けている。寺地は東西十二間、南北九間半である。

地　蔵　堂　（大字大野新田）

村の入口に本尊石造六面地蔵像がある。会津盆地では、殆んどみられない彫刻形式で、中部、西部によく祭られてある通例の像である。この六地蔵は、地域の特殊性と信仰が堅く結びついている。「ナデ地蔵さま」と尊称している。山道を通るとき、雪崩がある地へゆくと、この地蔵の信仰者は、不思議に妙音がどこからともなく聞こえてくるという。このときしばらく立ちどまると、行先に雪崩がおき人命は助かるという信仰がある。この地蔵は本尊であるが、拝殿の正面を吹通しにして外に祀られてある。

また地蔵堂は明治初期ころ初建し、のち再建されたもので良材の欅を用いているし、この屋根のグシ飾りに特色がある。この屋根形は大野の地蔵と酷似しているので、互いに影響しているものと考えられる。

この地蔵尊の祭礼は、三月と十月の各二十三日で、今でも小豆団子を供え参詣を続けている。

正　光　寺　（大字椿）　廃寺

萬秀山　臨済宗

本尊　観世音菩薩

椿の現在寺地と称している椿村肝煮宅地内に建てられた寺である。永正十三年（一五一六）柳津の正光坊をここに移して寺とし寺名を「正光寺」と改めたが、同年三月二十八日火災のため寺は全焼、民家も悉く焼失したという。寺地跡をみると巨寺ではなかったと思う。その後年を経て今から三七八年前の慶長元年（一五九六）に、本尊は柳津奥之院へ合祀し、檀家もその下に属した。この寺地跡に、石造の観音像が祭られてある。道

正　光　寺　跡　（椿）

端で通る人や車の平安を念じているのであろう。祈る人の美しい季節の花が匂うている。この寺の存在を示す鐘が残っている。貴重な文化遺産である。その縁の鐘銘を記す。

会津椿村正光寺　北禅代求之
寛保元年辛酉八月　日

（鐘の大きさ）
口径　二七センチメートル
高さ　二一センチメートル

この銘をみると、寛保元年（一七四一）には寺が実存している。この点は古記録と異なっているが、いつ頃廃寺となったかの記録はないので後日の研究としたい。

瑞　光　寺　（大字小巻）　廃寺

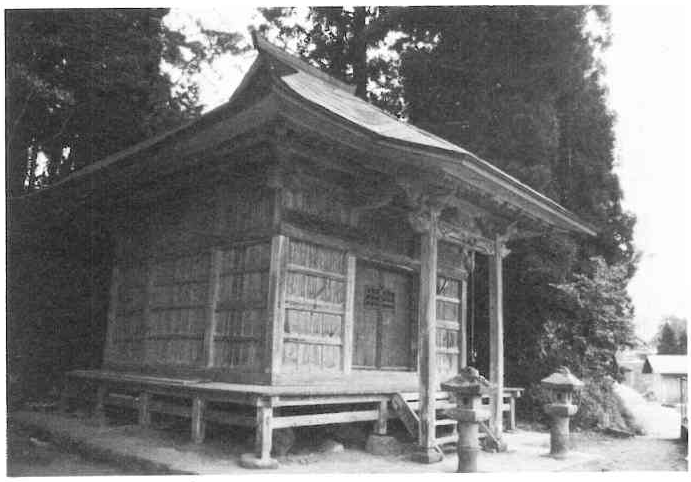
山号不明　臨済宗
本尊　不詳

只見川の流れが大きく左に湾曲する辺の突出岩上、即ち左岸段丘の上に建てられてあった。柳津円蔵寺の塔頭であったという。いつころ草創されたか、本尊がどんな仏であったかまったく不明である。しかし瑞光寺公園として、その寺名はいまに生きている。或る一書によると、本尊は観世音菩薩であったとも記されてある。くわしいことは記録もないので不明である。

水口（みなくち）薬師堂　（大字安久津）

本尊　薬師如来（瑠璃光仏）

長倉沢川の右岸で、安久津下平の水田の水口にあるため、この薬師を水口薬師と通称するようになったのである。昔は水口を神聖な所と考えた。それは耕地の潅漑水の最初の入口で、田の神の降ります汚れない所と考えていた。今でも岩手県には水口祭の行事があり、高田周辺でも稲の害虫を除く「虫札」を水口にさすのである。阿久津の人たちが、この山麓台地に薬師如来を祭った心を偲ぶことができる。この仏についての記録は、堂内の板書しか見当らない。それによると、この薬師如来は安久津の鎮守であり、その御神体の御本尊



水口薬師堂（安久津）

であるという。神仏混淆の時代なので、神と仏とは一体と信じ、その本地仏として信仰していた。いまは安久津の鎮守が稲荷神社で、明治初年か寛文五年の神仏分離のときにわけられたものと思われる。

薬師如来は、信仰者の健康を司るみ仏である。医者の少い山村の人々が、健康に留意し、み仏にすがったことのあらわれである。

西に龍蔵庵の飯谷神社遥拝所があり、神仏信仰の地として好適地である。

御丈六十五センチメートル、木造寄木造りで、黒漆の上に金箔を塗ったものであったが、いまは剥落して漆のみ残っている。仁慈の面相、右手の薬瓶そして右手の施無印は薬師像の定形である。制作の時代は江戸時代と思われる手法である。この薬師像以前に別に薬師像があったものと思われるが、それもはっきりしない。

御堂は享保（一七一六～三五）の頃まであったが古堂となったので、安久津の地首伊藤伊八郎一家が大願と、立場上率先して村人とはかり、宝暦十一年（一七六一）九月に落慶したのが現堂である。のち度々屋根縁板等を修理して現在に至っているが、そのうちで大修理をしたのが、大正十四年（一九二五）五月三十日に落成の祝典を挙げている。このときの世話人は、岩沢久松、北田忠雄、伊藤留吉、増井源蔵、船木忠治、船木金三、佐藤新吉の七人で、総経費四一八円三十八銭と記してある。このときの寄附者は、円蔵寺、野老沢、柳津の有志で、安久津は一戸毎に茅三メ、縄一把と人足の奉仕をしている。国道二五二号線近くに、交通安全と安久津の信徒の無事を祈られているようである。

この堂内の板書を記しておく。

棟（むね）　檄（だ）　後（のちの）　覚（おぼえ）　記（き）

水口瑠璃薬師如来は当村元祖の鎮守の本尊にて雲慶之御作也と申伝う。

御堂は享保年中迄御座候処大破し、それより数年御堂無御座候処、宝暦十一年辛巳当村伊藤伊八郎一族大願主にて仝六月五日釿初め、同八月十三日棟上、同九月成就仕、十月供養ス。

右願主伊八郎は当村元祖の伊藤次右ェ門彦也。

御堂願主　伊藤氏一族謹書

宝暦十一年辛巳九月吉日

安久津伊藤伊八郎一族

大工当料　柳津　内海次郎兵衛

兼坂儀八郎

脇大工　初右衛門

次　兵衛

長右衛門

富右衛門

利惣兵衛

真　光　寺　（大字藤）

恵日山　曹洞宗

本尊　釈迦如来

脇侍　文殊菩薩（向右）　普賢菩薩（向左）

藤は野沢組最南東の集落で、戦後の城四郎長茂の二十八館中の一の猿戻城館があった。東に只見川を界とし、会津・越後間の交通上からも、戦略的からも最重要な地であった。

真　光　寺（藤）

ここに仏教は信仰されていたであったろうが、寺院の建立はなかった。しかし人々は寺をたて、本尊を祭り、祖先を崇び、無縁万霊を供養したいと考えていたであろうが、その機は熟さなかった。たまたま元禄十五年（一七〇二）中荒井組出尻村（現北会津郡北会津村出尻）で、日光山真光寺を護持していたが、僅か十五戸ではその維持に限界がきて、これを取りこわすことになった。この寺は曹洞宗なのである。これをきいた門田村北青木の善竜寺の住職が、廃寺によるには全く嘆かわしいとて、藤村肝煎太郎右衛門、地首善七、仝彦之亟に移築を勧めると、三人は区民の意見を以って移築することとなり、仝年郡奉行所に移築を願した。直ちに許されて、元禄十六年遂に出尻村で解体、そして運搬し、現寺西の段丘、字上松ケ崎に建立したのである。宗派と寺号は旧の如くにしたが、山号は恵日山と改称した。これは肝煎太郎右衛門の先祖佐藤佐渡守が、磐梯山恵日寺で修業した思い出として、恵日山と改めたと寺史に見えている。

このときの御開基は、城四郎長茂、御開山は久巌全長大和尚で、真光寺第一世なのである。

二世　松山峯大和尚は、真光寺の隆昌の基礎を固め財政に力を入れた。竿入検地の際に寺地を免除地としたり、また宝暦六年（一七五六）には、村の南西山麓の長茂分骨の墓地に、館荘院殿善巌元公大居士として、開基碑を檀家と協力して完成した。あの大石はその鎮石であろう。

三世　梅秀鉄大和尚　在住不詳

四世　安竜薩大和尚　仝　九年

五世　全祥貞大和尚　仝　九年

六世　大仙牛大和尚　仝　五年

七世　正関宗大和尚

この七世のとき、明和三年（一七六六）五月二十三日寺の失火により全焼し、過去帳も全部焼失した。

八世　中興洞巌玄承大和尚は住職十六年間で、その間心血をそそぎ、檀家と一心同体となり、真光寺の再建復興に奔走された。その努力により、焼失後二十三年後の寛政元年（一七八九）薬師堂北の空地に、荘厳な寺院を完成させたのである。このころ藤全戸数一二〇戸とある。この戸数で再建のための資金、資材、労力の分配など、当時の農村生活を考えたとき、誠に大きな精進の賜である。このため中興の賛称を奉ったのであろう。

九世　厚充得恩大和尚　仝　二年

文化元年に恵日山真光寺由来記を編集した。

十世　台巌祖冽大和尚　仝十一年

十一世　学秀明大和尚　仝十九年

十二世　泰嶽秀峯大和尚　仝十二年

十三世　正山良覚大和尚　仝　五年

十四世　雄道春英大和尚　仝十一年

十五世　正瑞秀法大和尚　仝（兼）七年

十六世　円龍福成大和尚　仝十三年

十七世　湖水環宗大和尚　仝　八年

十八世　泰嶽瑞鵬大和尚　仝　七年

藤分校の教員も勤め、幼児教育、社会教育にも功績をのこし、敬慕された。

十九世　霊峯光禅大和尚　仝十四年

二十世　無外自疆大和尚　仝十一年

大本山正布教師に任ぜられ、講話も巧みで人を感動させ、童話作家、狂言作家と称される文才があった。藤分校の教員も長く勤めた。

二十一世　大心正道和尚　仝十九年

祖父（十九世）、父（二十世）の遺志を継ぎ、寺勢の隆昌のため努力し、檀家に散見する文献によって、『曹洞宗恵日山真光寺沿革誌』をまとめた。惜しいことに齢四十四歳で入寂された。檀家現在五十六戸、正道氏未亡人春氏が静かに寺を護持している。

薬師堂

本寺の南にたつ宝形造り、方二間の木造堂である。中に薬師本尊が祭られている。寄木造りで、薬瓶を失っているが、彫刻をみると慶派の手法もみえる。霊験頗るあらたかなため、柳津参詣のとき向いの街道を通られた領主、藩主家中の者は御殿場で疲れの医するように、休憩して遥拝したという伝承がある。脇侍などは長い間に散佚している。江戸初期を遡のぼる仏像であろう。

薬　師　堂　（藤・真光寺境内）

大　地　蔵　尊　（大字藤―真光寺境内）

真光寺境内の上藤への道添に、大地蔵尊の石仏がある。安山岩の軟質石なので、風化を憂いて師堂を建てた。地蔵の尊容は定形である。この像は文久元年（一八六一）五月で、藤全戸の信仰によって造立された尊いみ仏である。御堂をたてて濡れを防いだこの美しい愛情は、あの地蔵尊の心をとおして考えられる。

この地蔵に左の陰刻がみえる。

奉寄進　　惣旦那十方施
世話人
治左衛門、治右衛門、元作、長右衛門、惣右衛門、重助、重三郎
当時拾四世　雄道代造立
文久元年辛酉年五月二十四日

とあり、幕末のころの生活の苦難のときに、これだけの大造仏をしたのは、生ける人を尊く地蔵、死せる人をも救い助ける御利益を深

大　地　蔵　尊　（藤・真光寺境内）

く信じた。藤の人々の温い心が偲ばれる。

光　泉　寺　（大字大野）

寿命山　浄土宗

本尊　阿弥陀如来（旧地蔵尊）

この寺は由緒古くそして著名な寺である。大同（八〇六～八〇九）年中に、徳一大師が柳津に虚空蔵堂建立の際、この地から良材を伐り出した。その際、樵人（きこり）たちが盛夏なのに作業の汗に渇をおぼえても清水がなく、非常に苦しんだとき、徳一は深く同情して、六本の喬に加持して、清泉の湧き出ることを祈ったところ、霊験あらたかに清水が湧き出た。杣人は非常によろこび徳一を敬慕して、伐木製材に精魂をこめたという。この清水がいまもこんこんと村なかに湧いてある「徳一清水」なのである。やがて滞りなく虚空蔵堂の建立はおわり、落慶法もおごそかに修められた。徳一は再び大野に至り、清水のわいた大樹六株を以って六体の地蔵尊を彫んで、これを本尊として寺を創建した。この徳一清水に因（ちな）んで寺名を「光泉寺」とし、長寿往生を願って山号を寿命山と命名されたと伝承されている。このときは法相宗で、後に真言宗になったと伝えている。

光　泉　寺　（大野）

いつの頃かはっきりしないが、寺も仏像も寺宝什器もすべて火災のために失って廃寺同様になっていたが、寛文（一六六〇年代）のころ良専という僧が再建したのである。良専を中興の僧ともいう。このとき本尊は阿弥陀如来に替ったものと推考されるし、宗旨も浄土宗に改宗されたと思われる。

永く会津若松市の融通寺末であったが、地勢の関係もあって、現在では会津坂下町光明寺の末寺となっている。

こうしている中に、再び昭和四十六年七月十八日火災で焼亡し、檀家一同は先祖の菩提を弔うため現在のような光泉寺を三建し、本尊も頗る荘厳な阿弥陀三尊仏を祀り、日々信仰の花を供えている。

こうして、徳一の息のかかった寺をどうしても廃寺にすることはできないと、区民はますます信心を篤くして護持しているのは、うるわしい姿といわなければならない。

地蔵堂

光泉寺境内の南西に九尺四面の地蔵堂があり、そこに子安地蔵尊が祭られてある。六地蔵尊なのであるが、産子を右抱きにしている。その他四体の地蔵尊があったが、地蔵尊の例祭日になると、六地蔵として揃うという。子供たちと遊んだり、幼童の健康の勝れない信者が借出して、祈り遊ばせて祭っているという仏と人との深いつながりの風習がのこっていて、心温まるような素朴な信仰である。

山深い山村で医者も遠い僻遠の集落である。産子の安産と、子供も大人も無病息災を祈った真剣な信仰の証として、実に貴重な地蔵尊であり、この古いみ仏は尊い文化遺産なのである。

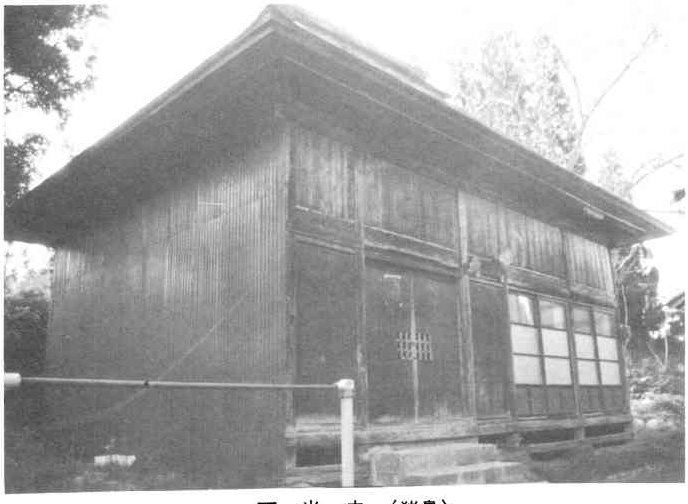
地　蔵　堂（大野・光泉寺境内）

西　光　寺（大字猪鼻村）

蓮寿山　曹洞宗

本尊　如意輪観世音

寛文五年住職の良順和尚の書上帳写が現存している。それによると、明応元年（一四九二）六月十日に、越前国から行脚して来た僧東桂がここへ開山・開基をした。そして庵をたてて、山号を蓮寿山、寺名を西光寺と命名し、自ら如意輪観世音像を彫んで本尊とした。その御丈一尺の座像であるという。東桂はここに数年住んで仏法をひろめたが、諸国行脚に出でて暫く無住となり、次第に寺も廃れたので、寛永十一年（一六三四）八



西　光　寺（猪鼻）

月、僧孝寿が来てこの衰亡を嘆き、檀家とはかり再興した。その裔族がここを守りつづけ、寛文五年に数代後の良順が住職として守護してきたという。草創から数えて一四三年である。書上帳には、百七十有余歳とある。また伝承で文献としてはみられないが『新編会津風土記』にも、この寺の開基は寿松院弦随正覚庵主であるといい伝えてあり、慶長十三年六月三日と書付けた位牌が祭られている。寿松院とは、この地の角田越前という人であると伝う。内陣には、阿弥陀如来像や観音像がいくつか合祀されてあるが、小さいもののその手法も地方色の濃い仏像である。戸数少い猪鼻の人々がこの寺の護持には、永い間の苦心があったものと思われる。

左に縁起書の書上書を原文のまま記しておく。

西光寺地蔵堂略記

陸奥州会津稲荷領猪鼻村蓮寿山西光寺者
明応元年壬子夏六月十日胡南北丘東桂和
尚従越前州行脚来開基当庵号山蓮寿名寺西光寺因刻如意輪観世音
菩薩之坐像安立本尊其像一尺而古瀑東桂住慈数歳而附法後昆以示
滅其裔流伝来及九世殆断児孫闕住数年故及頭頽矣爾来寛永十一年
甲戌秋八月上旬孝寿和尚再興当庵令住是其裔僅続来到予為七世孫
蓋考其旧暦従明応年中到寛文第五几一百七十有余歳乎略言野話一
絶欽捧高見

蓮寿山西光禅寺　　良順

寛文第五乙巳年春日

華　蔵　寺　（大字郷戸）

月秋山　臨済宗

本尊　聖観世音（旧薬師如来）

この寺はもと柳津円蔵寺の日月坊であったと伝えられている。坊の衰えと共に、永享十一年（一四三八）に郷戸に移祀し華蔵寺と改め、近江員粟野産れの宗観という僧が寺として建立したと伝えている。場所は不明であるが、文化（一六六〇）のときは、花田の東側の現在の寺林の地であったと『新編会津風土記』は記している。花田・丸山は山麓で地下水の高いところである墓地もこの近くにあったが、土葬の際の水葬にも似た様子に偲び難い気をもっていたらしい。

華　蔵　寺（郷土）

天正十七年（一五八

九）の伊達政宗会津攻略の際に敵のため全焼し、その後に現地に移したと考えられる。長く無住の時もあり、これを中興したのが、寛保四年（一七四四）に入寂した巌依和尚で、その碑も現存しているが座元の字がみえる。一寺の住職のときは力生と尊称するのであるが、これから考えると隠居寺であったのかもしれない。「月秋山」という山号も老師が月雪花を風流の友としたような感じがする。いまでは住職の世数も定かでない。もと本尊は薬師如来であったと記録にあるが、現在は聖観世音である。聖徳太子の孝養像も祭られてある。

寛文（一六六一―）のころ、臨済宗であったため柳津の円蔵寺の末寺となった。そののちも無住時代が続き、寺の破れも甚しくなり、百年余を経た古寺となり、祖先の霊を安らかに祭るにふさわしくないと檀家一同の協議の末、大正六年（一九一七）に現寺を改築した。仏像の数も非常に少いのもこうした歴史を表わしているのであろう。

寺の一隅に「華蔵寺改築記念碑」の碑が建立されてある（碑文は「下巻記念碑総基」参照）。

閻　魔　堂　（大字安久津―南岩坂）

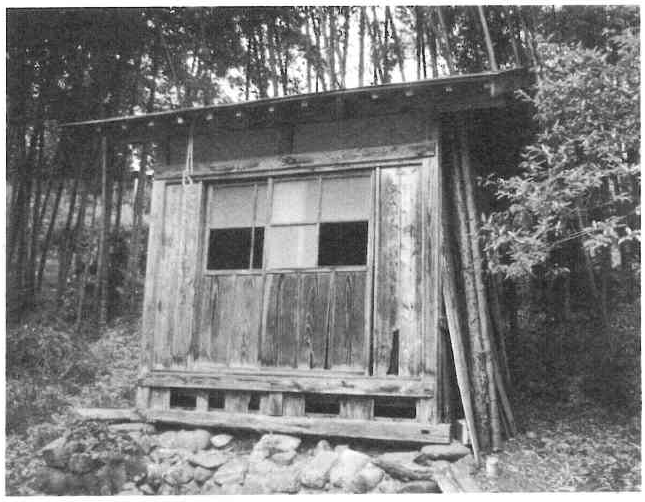
本尊　閻魔大王（桂寄木造）

側仏　不動明王

脇侍　閻魔十王ノ内一部

大字安久津（旧南岩坂）の北、北田忠弘氏宅に小堂を建てて祭られている。地域の人は閻魔堂といっているが、北田家にも古い記録はない。幸いに瀧谷の山ノ内家祖、山ノ内吉左衛門の認めた『会津正統記』について述べ、また伝承も加えて記すこととした。

人皇五十一代平城天皇御代大同二年丁亥空海（このあと徳一とかく）会津に下向し、南岩坂で虚空蔵菩薩像を彫み安置した。このとき悪津（安久津）に一人の善行者の善太夫婦がおり、すでに七十才に近い老夫婦で常に夫婦念仏して仏陀を信仰していた。徳一は感心して信心の次第をきくと、老爺は「極楽往生を願うのみ」と答えたので、徳一は「極楽往生は念仏を究めることである」と励ましたという。この老翁は善太夫という名であった。更に徳一は閻魔（皇后）を信ずることも併せ教えると、善太夫は宅内にある古樹桂の木を伐り、これで閻魔大王の像を彫むこととし、徳一は依頼されるまま三日間の中に彫んで善太夫



閻　魔　堂　（南岩坂）

に賜わった。感激した善太夫は、宅内に五間の堂を築いて祭った。

善太夫夫婦は深く仏法に帰依し、剃髪して道心となり、善太夫は法名を善入坊、妻は貞心尼となり、一層念仏唱和を続行した。近辺の村々もここに参詣し仏法は栄えたが、弘仁三年（八一二）七月十六日、善入坊は入寂した。このため七月十六日を釈迦堂の縁日として永く続けてきた。

その後天長二年（八二五）四月某日、ここへ旅僧が来て往昔の信仰を聴き甚だ感心し、更に小堂を建てて、釈迦如来（浄長作）の像を祭った。貞心尼はますます念仏に精進したが、天長六年（八二九）二月十八日安らけく往生を遂げた。帰依する人々列をなし、旅僧誉貞は更に仏堂を整え、石井山閻魔寺と名づけた。

旅僧誉貞は、近江国神崎の人で石井兵部という士であったが、延暦（七八二―八〇五）のころわけがあって僧となり、誉貞坊と称していた。寺の山号を「石井山」としたのも自分の姓に肖かったのである。厳貞はこの後も、弁才天、小堂、地蔵堂、文殊堂、勢至堂、稲荷堂も新築し、七堂悉く備わり、のち天台宗に加わり永く栄えた。

誉貞はこうして仏法流布に心魂を捧げたが、老にはかてず、仁治元年（一二四〇）九十九才の高令で安らかに涅槃の境に入られたと伝えている。今は釈迦堂内に本尊と不動明王及閻魔十王の一部と兜跋毘沙門天（一本彫）が祭られている。

明治九年安久津の龍蔵庵舟木神官が職をやめたあと、神官となり舟木神官司掌の神社祭祀を行ってきた。堂内に神札板木が数多く残されているのはそのためである。

月　光　寺（大字野老沢）

医王山　曹洞宗

本尊　釈迦如来（旧薬師如来）

脇侍　文殊菩薩（向右）　普賢菩薩（向左）

月　光　寺（野老沢）

この寺の創建は、貞永元年（一二三二）で、開基は野老沢村目黒雅楽助平重行で、開山は真密の観宥である。重行は故あって武蔵国目黒村に隠棲したことがあるので、村名を姓にとり、後に河沼郡出ケ原（現西会津町）に移り住んだ。重行は非常な薬

師如来信者で、奥州に下るとき薬師如来を背負って来て、出ケ原に祀って信仰を続け、この月光寺の本尊とした。真言宗の本尊としては異形であるが、祖先の供養のために寺の建立を成し遂げた。のち月光寺は廃れた。十一代目黒重保はこれを憂い、応永三十三年（一四二六）丙午八月二十二日月光寺の再建につとめて実現した。このときの住職が洞家の荒明覚賢であった。このときから、真言宗を曹洞宗にあらためるのである。寛正四年（一四六三）癸未には、本尊の薬師堂を創建して別に祀ったかわりに、寺の本尊は現在の釈迦三尊とした。天正十七年（一五八九）には伊達氏の乱入によって戦災をうけ、廃寺となった。住僧天養はこの復興に強い情熱をもやし、目黒家十八代重就を主軸に村民にはかり、とうとう元禄元年（一五九二）に草庵に住みつつ、先祖の供養と村民の教化のため再建願を芦名氏に出して許され、翌二年再建は落慶した。このときの導師が牛沢の大徳寺の僧を担家が招いたので、これから大徳寺末寺となるのである。

あえて八十五年後の延宝六年（一六七八）に火災で全焼、檀家で三建したのも九十八年後の安永五年（一七七六）に全焼し、現寺は慶長十五年に建立されたものであるという。

寺内に聖徳太子像が祭られてある。延文六年の側銘ある古いみ仏である。

住職は現四十四世古月清光で、仏堂と檀家の平安を日夜祈願しているのである。石段右の大地蔵尊や左の六地蔵尊は静かな寺域にマッチしている。

薬師堂

寛正四年（一四六三）九月三日創建したのは、一間四面の草堂でまことに素朴であった。この薬師如来は、法量御長（たけ）一〇五センチメートルで古色な座像で、当初のものとおもわれる。しかし脇侍、日光・月光両菩薩、十二神将（一体欠）は後に造像したものであろう。棟札があったという。

表

奉造立一間四面草堂
大担那　平盛詮
寛正四癸未九月三日
本尊　薬師如来

裏

応氷三十三年丙午八月二十二日（一四二六）　荒明覚賢

と月光寺に写がある。

今も薬師如来の信仰は続いており、四月八日の祭日には、参詣の善男善女が続く。

正　徳　寺　（大字小ノ川）

多宝山　臨済宗

本尊　無量寿仏

ここの寺は、今こそ住居地の東低地になったが、住居の移転以前

は住居地より高地にあった。滝谷川むかいの三百刈に鎮守稲荷神社があったので、寺の標高もそれに近い処を選んだのである。

永正十六年（一五一九）に柳津にあった「松徳坊」を移して寺となし、「松徳」と同音に寺名を「正徳寺」と付けた。このときの僧は教賢である。

古書には浄土宗であったとある。寺の内陣に祭られている仏像をみても、浄土宗の信仰仏の阿弥陀如来が本尊で、その他に幾体もある。寛永七年（一六三〇）臨済宗に改め、柳津円蔵寺末となる。明治三十年頃までは住職もいたが、その後の現在までおよそ七十年近くも無住時代が過ぎ、いまは当時からみると寺も荒廃している。

境内の北は墓地で、南には、万霊塔・石の六地蔵尊などが祭られている。墓碑の中でも正徳（一七三〇―）年間のものがある。

正徳寺は昭和二十八年に柳津発電所ダムの建設が終り湛水すると住居は上中平、中平に移築して寺より高くなってしまった。然し災害史をみると、正徳寺が水害罹災の記録がみえていないので、相当高い位置であったことを証している。

中　野　薬　師　（大字中野）

本尊　薬師如来（瑠璃光仏）

脇侍　日光・月光菩薩、十二神将（一体欠）

御丈八十五センチメートルの寄木造りの大仏である。漆黒で金箔のあとがいくらか残存している。持物も欠けていない。この本尊は、手足縵網相である。両手に少いが蹼をもち、庶民の願いを一つ残らずすくい上げて叶わせるとの意を持ち、足には三本の足輪が刻まれている珍らしい仏像である。肉髻はないが、唇には朱を染めている。台座と光背は後補のものである。

中　野　薬　師　堂　（中野）

また脇侍の日光・月光両菩薩は非常に優雅な姿態で、その体容、衣文は慶派に似たやわらかい彫刻で、彩色も施されている。十二神将は十一体が現存していて、小型で彩色も美しく、何れも後補のものである。信仰は非常に広く深い。願をかけたとき、内陣から米袋をさげて使い、それが叶ったとき米袋を倍返し供えて感謝するという風習がいまも現存し続けられている信仰である。

この薬師如来については古い由緒が箱書に遺されている。御厨子に使われる箱の側に記されてあるものによると、御本尊は行基作で、治承（一一七七―八〇）のころ和州菅原寺に祭られていたのを、源頼朝が武運長久祈願として鎌倉に遷された。その後に頼朝は奥州平泉の藤原氏を亡ぼしたときの功臣山ノ内氏に、会津横田の地を与えた。ところが応永二年（一三九五）に、横田地方に悪疫が流行して領民が苦しむのを見て、この軽安を願うため、さきの鎌倉の薬師如来を横田に移し平癒を祈らせた。御霊験あったものと思われるが、その薬師如来は本名村（現金山町）に安置された。その後の明徳（一三九〇―九三）のころ、芦名氏の臣の田崎家が中野村に舘を築き、山内家の息女を妻とし、その妻が子を産んだあと乳の病となり、母乳が不足されて悩まれた。或る夜、妻の夢じらせに、本名村の薬師如来を信じると、その御利益で母乳の心配のないことを知り、応永二年（一三九五）に、本名村から薬師如来を移して祈願したところ御利益にあづかったと記され、それ以後はこの薬師如来を中野村に祭ることにしたという。

前に記した米袋献納の信仰も、この歴史を示しているものである箱書を左に記しておく。

（その一）

瑠璃光如来濫腸高志行基作、和州菅原寺治承代源頼朝朝祈武運及再興家本尊奉移鎌倉其後佐殿奥之衣川亡常時功臣討奥御庄功士議床如士、山内氏後大沼士受腸望欲帰封地本尊貰受入領土、此居城御蔵入横田到、後代領内本名辺士大流行疫癘、為鎮後御体郡地、厥後以来安置本名村、明徳世芦名臣田崎士有、稲川西隅以当中野為居館山内息女娶中野為室、婦出子罹乳演不治　高祖日霊夢本名負仏在、従告祈即得以後功徳

弐猛当山龍来主

干時応永二年四月七日暁云々

（其の二）

薬　師　如　来　厨　子　名

応永二年御蔵入本名村従飛来給、東光瑠璃光薬師如来尊像者行基

菩薩御作日本第一仏也、縁起本寺収之、今茲厨子再興者也

安政三辰六月十二日

多宝山正徳禅寺

百拙謹書

華　蔵　寺　（大字郷戸）

月秋山　臨済宗（妙心寺派）

本尊　阿弥陀三尊仏

創建については、いつの頃の開基は誰であったかはわからない。阿弥陀三尊を本尊として祭ったので、臨済宗ではなかったと思う。寛文年間（一六六一―七二）に、柳津円蔵寺末寺となってから、臨済宗になったと推考される。長い間の無住のため、寺も腐朽し衰えたので、大正五年に檀家の協議により、大正六年（一九一七）に現在の堅固な建物となった。この長い歳月のうちに、仏像の何体かも失い、現存の本尊は新しい聖観音像であり、本尊の傍には、聖徳太子像が一体残存するのみである。現地は、日あたりもよく平地で、み仏の澄んだ清浄な心を培うによい地である。月秋山の号も意味がある。いつのころ、華蔵寺坂からここへ移したかも記録はない。

境内に、子安観音像の石像と、優婆神（うばがみ）の大石像二体がある。幼児を右抱きにした像である。古いころは、医者に遠い僻地であったため安産の祈りを、この周辺の婦人が心から祈願したのであろう。優婆神は、お産を助けると信じられた神なのである。

また境内に、大正六年華蔵寺再建の顛末（てんまつ）を記した立派な碑（いしぶみ）がある。寛文五年『稲川荘牛沢組郷村万改帳』によると、

「月秋山華蔵寺、済家宗、村中の民屋に続く。寺内東西十二間、南北七間、来由別紙に有之。寺免なし。柳・季あり」

と記されてある。

華蔵寺再建記念碑の全文を示す。

興禅護国論日天哉心呼天之高不可極也而心出午天之上地之厚不可測也而心出干地之下天地待我而覆載日月待我而運行四時待我而変化萬特我而発生大哉心乎夫天地間人物成形而後莫一物不具此心者故一生作業成無上菩提由之随三途由之悟由之迷由之孝由之忠興家由之喪家由之出生入死莫不由之者也仏教東漸入我神州感化人心翼賛政化茲壱千数百年億兆或浴厥化懐厥徳大哉仏乎　当山伽藍昨年為大雪遭倒潰之厄於茲檀徒諸氏為仏恩報謝奮起精進経営再建而工完竣仍而鞏石以示範後昆爾云

大正六年丁巳九月一日

円蔵寺住職沖津勘宗撰並書

延　命　地　蔵　堂　（大字八坂野）

地蔵堂は村東の段丘の中程にある。昭和四十七年に改築したお堂で真新しい。四注造りで蔀戸を正面にしつらえた。

この堂内須弥壇に二体の仏像が祭られてある。本尊が延命地蔵尊

で義軌とは異なるが、永年信仰を続けてきた霊験あらたかな地蔵尊である。地蔵尊は木造寄木造りで左手首を失っているが、白毫の水晶は目もくらむような清澄な輝きで、地蔵尊の温容を一段と引きたてている。頚の瓔珞は切金造り、光背は渦雲模様の舟形光背である。この地蔵は文政八年（一八二五）酉四月吉日に祀られたものである。厨子にこれを示す文字がみえる。

奉納　文政八年酉四月吉日
十八才　長谷川茂兵衛

とみえている。地蔵の御丈は四十三センチメートルであった。また地蔵尊の隣には、子育観音が祀られてある。地蔵尊より四十七年前に祭られているので、はじめ子育観音堂を建て、その堂内に地蔵尊を祭ったと推考できる。文化六年の『新編会津風土記』には、このお堂の書上はみえていない。

観音菩薩は、一木彫成の子供を左抱きにし、子供の左手は伸ばして母の乳を握ろうとする像容である。慈母の愛情のほのかさが感じられる。光背はなく衣文などみると地方作である。この観音は安永七年（一七七八）の奉納である。厨子に祭られているが、その左側には左のような書付がある。

奉納安永七年六月二十四日
沼上村長正寺
茂左衛門
当村大工　惣

庵主　尊映代

とある。沼上村は笈川組沼上村（現在の河沼郡湯川村）で、ここに長照寺（曹洞宗）があり、もと真言宗であったが、寛文四年（一六六四）に曹洞宗となった寺で、「長照寺」が「長正寺」と厨子書したのは、音が同音のための誤記であろう。沼上村と八坂野の関係については調査したが不明であった。

長　蔵　寺（大字長倉）

高昌山　曹洞宗

本尊　釈迦如来（座像）

長蔵寺須弥壇には多くの仏像が祭られている。地蔵尊・如意輪観音・聖徳太子・優婆神などである。この仏像はあとで記すところに祭られていたものが、堂の汚損倒屋などで、寺に合祀されたものである。

長蔵寺は永禄四年（一五六一）に是春という僧がはじめて開いた寺である。非常に古い寺であるが、その寺史ははっきりわからない寛文五年（一六六五）の記録によると、寺地東西三十九間、南北三十七間あった。これが文化五年（一八〇八）になると、寺地東西十八間半、南北二十七間の年貢地となっている。この一四〇年間に寺地をもって、寺の維持管理にあてきたものと思う。このときはすでに独立しているのでなく、会津坂下町の定林寺の末寺となって

いる。また本尊釈迦如来もはじめは三尊仏であったと考えられるが、現在は脇侍二体も失っている。

しかし檀家の人々は、祖先の守り続けてきた寺の信仰も厚く、昭和三十七年に現容に改装したのである。

また地蔵尊は寛文五年にはすでにお堂を失っている。堂地東西十三間、南北九間であったが、三十三年以前に破損して堂はなく、地蔵は寺に移したとある。村中に地蔵堂があった。また太子堂は、寛文五年に村南五間のところにあった。しかし五年以前に破損し寺に像を納めたとある。聖徳太子堂は、東西二十間、南北六間であった。これらの土地は、地名がのこっているかも知れない。

また婦人の信仰、特に安産を守護するという如意輪観音がある。半伽六臂の観音でこうした山村として、昔医者は遠い助産婦の少いところでは、特に女性の信仰が深かったと思われる。いまも供花がみられるのはその証(あかし)である。この観音は寺か地蔵堂かに祭られたものであろうが、そのことは記録ではわからない。

また寺地内に見事な彫刻でしかも大型の石仏像がある。頭に鳥居を付し、六臂で持物(じもつ)も整えた石像である。弁財天で、長倉の人々が地域への福のお授けと、用水潅漑水のみちたりることを祈った尊像である。風化も甚しいが、記念彫刻がないので、いつころ祭られたのかはわからない。

月　光　寺　（大字柳津）

円満山　真言宗

本尊　大日如来

脇侍　愛染明王、不動明王

柳津の東山麓にある。民家から距てて静寂な地にある。寛文五年『稲河領牛沢組郷村万改帳』によると、

「月光寺。真言宗、村の巽一町隔山半腹に民家を離れて在寺。寺地東西十五間、南北二十三間、由来之書別紙に在。銭百五十文円蔵寺より付置。杉・榎・桂在り」

とある。円蔵寺と深い関係を持っていた寺院である。来由別紙にあるとみえているが、その縁起書はいまは失っている。

月　光　寺　（柳津）

しかし文化六年（一八〇九）の『新編会津風土記』によると、

「月光寺。境内東西二十間、南北十八間、免除地。村より辰巳の方一町山麓にあり、真言宗、円満山と号す。府下道揚小路観音寺本山なり。開基詳ならず。常に松風羅月を友とし、閑寂の境地なるにより、また山居寺と云。本尊大日如来、脇立不動、愛染客殿に安ず」

と記してある。この当時すでに開山のことについて不明であった。しかし滝谷山ノ内家蔵の文書によると、

「弁財天並釈迦仏奥之院に有。脇庵六院の内見性庵建福庵今に有月光寺、龍沢寺可レ成」

とあり、また別に、

「明応元年（一四九二）壬子月光庵を為レ等、真言宗円満山号二月光寺一是称二山居一黒川観音寺の隠居祐尊令レ住是為二開山一」

とある。瀧を背に静寂な山麓のこの月光寺は、真言密教の修業寺としても最適地であった。山居寺（庵）という別名も、円蔵寺の僧たちがこの寺で時には修業、時には休養をされ、真言や禅の三昧境に浸られたのかも知れない。

現在客殿に参入して拝すると、他の寺と異なり、数多くの仏像が祭られてある。第五十世現住藤田栄真師の話によると、この近くに同宗の長流山瀧谷寺があり、幕末のころ山崩れで倒壊し廃寺となったため、同宗のよしみでこの寺に合祀されたものであろうと話されたが、納得の得ることである。

客殿にすばらしい欄間の奉納がある。その彫刻は双龍の向いぼりで、精細巧緻な彫刻である。その墨書銘に、

「享保十七年（一七三二）閏五月八日、忠奉、八日講、東粛講」

とあり、各講で一間宛奉納されている。さきに述べたように寺の縁起書は失われているが、現寺はその頃に改築されたものでなかろうか。寺宝として、俳人俳画録があり、幽霊図二幅その他多くが蔵されている。

昭和三十一年の大水害にも、寺地の一部流失したが、幸いに建物の被害を免れたのはみ仏の御守護というほかはない。

なお、『柳津秘録』によると、明暦二年（一六五六）三月九日と、延宝六年（一六七八）十一月八日の二回火災のため、全焼したと記されている。延宝火災から五十四年後に欄間寄進があるので、この間に現寺は建てられたものであろう（倉裡は別である）。

瀧　沢　寺（大字柳津）　廃寺

長流山　真言宗

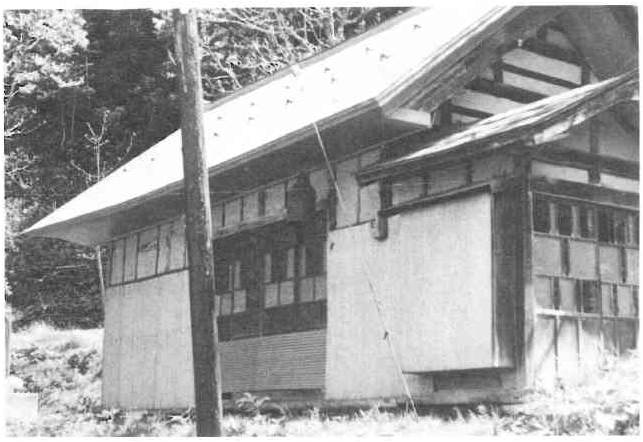
円蔵寺の脇庵六院があった。月性庵・建福庵・月光庵・龍沢庵・瑞光庵・示現庵であったと記され、その頃に月光庵は今の月光寺、龍沢庵は今の龍沢寺であると『会津正統記』に記されている。また同書に明応三年（一四九四）甲寅龍沢庵を祐尊が寺と改め瀧沢寺とし、長流山と唱え、爰に隠居す。是を龍泉院滝之坊という。山号の長流の名は裏にある二階渓流の糸瀧にちなんだものと推考される。

この寺は文化六年には立派に存在されているが、幕末のころ裏山の崩潰によって潰され、それ以後は再建せず無跡寺となってしまった今ここの寺地に行ってみると、平担地のみが寺跡を語るように草むらの中に隠見している。廃寺年号の不明なのが残念である。

慶　福　寺　（大字軽井沢）

松巌山　曹洞宗

本尊　地蔵菩薩



慶　福　寺　（軽井沢）

この寺は天正十八年（一五九〇）に越後国の僧峯月が味付して庵をつくり寺としたが、長い間の無住が続き腐朽した。その後に元和四年（一六一八）高順という僧が来て村人と談じ、本尊を地蔵尊として、天寧寺十三世善尭を請い開山として末寺となり、曹洞宗であった。

境内東西二十四間、南北十間半と文化五年書上している。大正末頃に朽ちた寺建物を潰して改築したが、これも仏像仮保管所という雨露を凌ぐほどのもので、これも昭和二十八年の分校改築のときとり払い、別に集会所を兼ねた仏殿安置所とした。

本尊地蔵尊は寄木造りで、御長八十二センチメートルで白毫は輝き比丘形の美しい手の合掌地蔵尊である。この本尊は会津地方に数少ない沓履（くつぬぎ）である。合掌と慈眼と共に人の心にぬくもりを与える姿態である。その隣は舟形光背を持つ上品下生の阿弥陀如来像である。白毫、肉髻、そして左手の一部が欠けている。九品（ぼん）の浄土を希求したこの村の人々の心がきこえてくる。その他は韋駄天像、達磨太郎像、再興開山善尭和尚像などが祭られている。信仰も深く、特に銀山繁昌のころの信徒と参詣者はものすごく多く、百万遍行事も盛大に勤められていた。このころ求められたものに、釈迦涅槃図がある。近年新しく表具の改装をして荘厳さを増している。二月八日の涅槃会（え）に掲げて参詣しているのである。

鰐口は安永二年（一七七三）二月吉日会津若松市材木町星野重喜鋳工のもので、軽井沢の観音・地蔵講中で寄進したものである。また境内には、石像如意輪観世音がある。弥勒型で彼岸の安穏を祈って、明和八年（一七七一）九月吉日に時の慶福寺住職的水明慶の寄進のものである。嘉永二年（一八四八）には、銀山の古生忠之亟寄進である石造地蔵尊、そして明治三十九年（一九〇六）三月二十四日、多くの寄進者による銀山採鉱犠牲者供養の地蔵尊がある。心静

かにこの人たちの冥福を祈っている合掌地蔵尊である。

安　穏　寺　（大字麻生）

法流山　真言宗
本尊　薬師如来
脇侍　失いてなし。

ここにはもと寺院がなかった。ところが天文二十一年（一五五二）壬子五月二十一日西方邑の地頭山内右衛門佐信重が、三島町西方邑御坂山大高寺を攻めたとき、坊舎を討ち亡ぼして押領し、そのときこの大高寺の三十六坊も悉く失うとした。幸いに延命坊は延命寺と改めて、大石田にのこり、安穏坊は隣村でもあったためと、村の人達の崇仏の心の深いため、安穏寺と改め、天文二十一年（一五五二）（一説に天文十七年）に移築したという。このときの開基は、宥尊といえ、笈川組浜崎村遍照寺末となった。おそらくこの事業の主唱がこの僧で、遍照寺住僧でなかったかと思う。開山と書かず開基と認めてある。従って、真言宗であった。

その後、明暦（一六五五―五七）の火災で寺は全焼し、什物・古器・縁起・過去帳をすべて失ってしまった。その後は無住時代もあり、幾変遷続いたであろう。日光・月光の両脇侍及び十二神将等も失ったのは惜しいことである。

現在は本尊の外に、宗祖弘法大師像、子安観音像二体、不動尊（一ノ瀬利兵衛寄進）、地蔵尊が祭られてある。

現寺の建造は、昭和二十年四月一日である。

安穏坊の移転については、考証すべき事項もあるが、文献も見当らないので、後日の調査に残すことにした。

二、西山地区

観　音　堂　（大字砂子原）

本尊　十一面観世音菩薩

鎮守熊野神社の境内に隣接し、方二間の堂宇六尺に三尺の祭壇向拝があり、法量御丈三十八センチメートル、全高四十五センチメートル、寄木造りの本尊が安置されている。

この堂の由来は、康正二年（一四五六）山内家の祖山内左衛門助信憲が、相州鎌倉からこの地に来住した時に釈迦之像・薬師之像・春日明神などと共に十一面観音像を供奉したものである。信憲の持仏であり守本尊であった。系譜には「十一面観音像　信憲守本尊一盃館」と記してある。観音像再建之記には、

「当所十一面観世音菩薩ハ先祖上杉信憲之守本尊にして従リ相州鎌倉奉ッテ擁護シ来リ而安置ス当郭之北壱盃館ト云所ニ」

とあるから当初は一盃館に安置されたのであるが、天正末年の戦乱以後蓬茨の中に埋もれて一二〇年も過ぎ堂宇は荒廃した。そこで山内清左衛門重信（蕃信）はこれを憂いて正徳二年（一七一二）に再興し、同年十月十日柳津円蔵寺鼎宗和尚を頼み法要を執行した。再

建の場所は神の湯の墓所に隣接する地であり、今もその礎石が数個みられる。道路の拡幅工事によって取り壊されたが石段も敷かれていたという。

享保十七年（一七三二）の『大谷組村方目録』には「観音堂　弐間四面　別当　湯守　清五左衛門」と記されている。これは再建二十年後の記録である。堂の規模二間四方、神の湯の湯宇山内清五左衛門が維持管理していたことが明らかである。清五左衛門は名を信章といい重信の嫡男である。

神の湯は軽井沢銀山盛衰の影響をうけ、銀山の衰亡と共に神の湯も衰え、観音堂の維持管理もできなくなったものと思われる。現在の堂宇の建立年代不明であり、また本尊も後代のものである。祭壇には木彫座像の大日如来も安置されている。婦人の観音信仰は篤く、観音講が結ばれ組を設け輪番に世話役となり、日を選んで集り公民館に観音絵像を掲げ、香華を供えて信仰を語り御利益を悦んでいる。

地　蔵　堂　（大字砂子原）

創建年代不明であるが稚蚕飼育所の近くに堂宇があった。地蔵菩薩は、六道の世界にあって衆生を救い、また賽の河原の子供を救い子供の守神であり火除けの仏でもある。地蔵堂は子供の集まる場所でもあり、村中から離れていたので昭和二十八年旧七月現在地に移転改築したのである。堂の規模三間に二間半、本尊は石像立像を新たに造立し(若松石保作)、同年七月十五日入仏開眼法要を執行した。この時の世話人は、金子　実・同寿一・同辰美の三氏であった。

薬　師　堂　（大字黒沢字前原）

松王山　薬師堂
本尊　薬師瑠璃光如来

『新編会津風土記』には寺跡として、

「村より亥の方三十間にあり昔松王山薬師と云寺ありしと云、宗旨及何の頃廃せしか知るべからず」

とあり、『大沼郡誌』には、

「中ノ川村大字砂子原字前原に在り会式四月八日境内地二十九坪官有地なり砂子原西念寺の受持なり」

とある。所在地の違いは郡誌の誤りである。

草創以来の変遷は詳らかでないが、現在薬師堂と称している。昭和十七年の仏堂所属申請書資料の中に由緒沿革として、

「当黒沢薬師堂は草創の年月久しく旧記文書の資料乏しく縁起審かならず、古老の伝うるところによれば当薬師如来は米山薬師の分身なりと云う。天文八年（一五三九）頃行脚僧尊像を供奉し当村に来り字松橋と云う所にて尊像忽ち重量加わり恰も磐石の如く荷負すること能わず、止むなく尊像を捨て何処にか去り行方を知らず、然るに村人多数霊夢を感じ草叢の中に尊像を得て驚喜惜く能わず即ち有縁の地なりとて村人相謀り松王山薬師寺を建立し尊像を安置し供養尊崇せしと云う。寛保元年（一七四一）に至り如

何なる故にか此寺を縮少して現在の薬師堂に改築せり」

と記され、天文八年を草創としているが、『会津正統記』には、

「人皇百四代後土御門天皇文明十一年巳亥会津大沼郡金山谷黒沢邑に薬師堂を山伏和光院建立」

とあり、文明十一年は一四七九年であるから由緒による草創説より六〇年上代となる。寛保三年（一七四三）に堂宇を改築したことは、当時の名主虎之亟が書いた『薬師堂建立帳』によって明らかである。

薬師堂建立帳

大沼郡金山谷組黒沢村薬師堂大破申候先組頭八兵衛勤候時分取立当組頭七三郎勤候時建立仕当村他村之挙賀を以成就仕候名主組首大工頭記申候　以上

寛保三年亥八月吉日

大工柳津村掃部右衛門
同　平八郎
同　五右衛門
黒沢村先組頭八兵衛
同当組頭七三郎
同施主名主仮役
虎之亟

昭和四十二年七月、屋根改修の際発見された奉納額によっても右のことが判り、更に安政三年（一八五六）に上家の修復がなされたことも明らかである。

寛保三年
奉建立薬師堂
癸亥五月吉日
黒沢村惣村中百姓
同村名主與役　虎之亟
同村組頭　七三郎
先頭　八三郎四代与相始

寛保三年大工棟梁柳津住内海鴨右衛門
千財棟　同村　脇門悴　平八
万財棟　同　内海喜右衛門
徳自財棟　同　藤村藤右衛門
癸亥五月吉日　木引　樹木権之亟

安政三年
上家仕置　砂子原
棟梁　大工苗門蔵
越渡　昭和
同　伝七
黒沢村惣村中百姓連中
同村名主藤四郎
同村組頭　雄之助
同村百姓中三十郎

現在の境内地八十六坪、御本尊は俗に「お薬師様」と尊称し住民の崇敬をあつめている。本尊は寄木造坐像で御丈四〇センチメートル、仏師年代共に不明である。木彫の日光・月光如来像が御脇立として安置され、更に十二神将が安置されている。

明治三十二年に鰐口を新調した。この時砂子原・胄中からも募金している。寄付請願簿によると、砂子原から合計七円十三銭、胄中

から他村者を含め十三円六十五銭であった。

昭和十三年には近隣の信徒から三一四円の浄財の寄進を仰ぎ、大規模な堂宇の改修工事と仏具の新調が行われた。その時の世話人は、伊藤巌夫・伊藤伍一・伊藤　清・伊藤　栄・渡部貞伍・伊藤俊八郎・伊藤市次・伊藤一左・大工棟梁は胄中武野彦市であった。四月七日に落成し、八日遷座供養法会が執行された。

鰐口には「正法顕揚・皇運隆昌・昭和十二、三年日支事変皇運戦勝・黒沢部落信徒一同寄進」の銘がある。

更に、昭和四十二年に至り屋根修復が行われた。

薬師堂屋根修復之記

当薬師堂は度々修復を重ねて現在に至り世代の推移に依り萱葺の屋根をカラートタン葺に改め参道両側の杉並木四本を之が修復の代金に充て

施工者　大沼郡三島町西方板金工小堀金吉

代　金　拾四万五千円也

竣　工　昭和四十二年七月二十五日

社寺総代　　区長　伊藤周喜

伊藤一左　　委員　伊藤辰美

伊藤　栄　　光雄

総一

良一

功

三十郎

霊験あらたかにして、世人の間に、お姿を拝むと眼がつぶれると云い伝えられていたのも、信仰の深さを物語るものであろう。

会式正月八日と四月八日で、戦後御開帳を行うようになった。西山地区で統一祭礼が施行されるまでは、黒沢地区は四月八日を祭礼としていた。砂子原西念寺の所属仏堂である。

観　音　堂　（大字黒沢）

本尊　聖観世音菩薩

『大沼郡誌』には、

「中ノ川村大字砂子原字前原に在り会式四月八日境内地八十六坪官有地なり受持は砂子原西念寺なり」

とあり、字名砂子原とあるは黒沢の誤りである。願音堂は昔は下黒沢に建てられていた。堂の跡地があり、薬師堂跡地の南方約一〇〇メートルの箇所面積凡そ六〇坪がそれと思われる。跡地に小さな農道があり、観音堂にまつわる石が安置され（現在不明）、道行く人が供えた花もみられたのである。その下方の平旦地一帯は野菜畑となっているが、ここは住居跡で生活用品が検出される。現在地に再建された年代は、「文化四卯三月黒沢邑中安全　再興　鈴木隼人」とあるから、文化四年（一八〇七）と考えてよいであろう。直径十八セ

ンチメートルの鰐口が現存する。「正徳五乙未蔵四月七日施主黒沢村伊藤茂兵衛ノ母」と刻名がある。一七一五年のものである。堂の大きさ問口三間、奥行二間、祭壇に木像立像御丈四十五センチメートル、全高五十八センチメートル、寄木造りの本尊と聖徳太子像が安置されている。聖徳太子像は珍しく中ノ川筋には他にみられない。牧沢・久保田にあり、牧沢の元太子堂は聖徳太子を祭ったものである。

薬師堂と共に村人の尊信をあつめ維持管理されてきた。

不動尊堂（大字胄中滝原）

胄中滝原の県道の傍らに問口一間半、奥行二間の不動尊堂がありその下に鳴音山谷に響き壮観な滝がある。これが胄中不動尊で高さ五丈、余幅一丈二尺『大沼郡誌』にも名所として紹介されている。『会津正統記』によれば、この滝は長承三年（一一三四）に中ノ川大洪水にて山崩れによってできたとしている。この頃は燕中邑と称した。創建年代不詳、現在の堂宇は明治二十年頃の建立で、四尺に三尺の祭壇には石像御丈七十二センチメートル、全高一〇八センチメートルの不動明王が祭られている。村人は大滝不動明王とも大聖不動明王とも尊称している。堂の前には石造りの宝剣が立てられている。不動とは仏教の菩提心をいい、菩提心を求めて修行するのに障害となるものを、宝剣によって破摧する力を発揮する神（仏教化した神）が不動明王である。修行者は滝にうたれて邪念を克服するのであるから、不動堂は滝の近くに建てられる。

当村二瓶時男氏の先々代が不動信仰篤く、維持管理を村に申し出て以来代々管理している。

当不動尊堂について次の伝承がある。

平安の昔、坂上田村磨呂が蝦夷征討の時、この地に軍を進められ土族平定の折、遠くにドウードウーと地面に響く音がするので家来に調べさせたところ、この先に「しぶき」を立てた五丈の滝があると告げたので、田村磨呂は自らその滝をのぞいたところ、滝の落ち口に金色に輝く不動明王が立っているので、これは霊験あらたかな明王であろうと土地の名工に不動明王の像を彫らしたものだといわれる。

地蔵堂（大字胄中）

真光寺の上り口に方二間の地蔵堂がある。現在の堂宇は明治十五年に再建されたもので、再建前は居村に建てられていたが、再建の時現在地に移された。創建年代は不明、祭壇には本尊木彫立像約五十センチメートルの脇仏二体が安置されている。脇仏の裏には、

「風霜寒月信士　安永三午七月十七日　楽室玄法信女　干時安永四乙　七月十七日」

の銘がみられる。死亡が相次いだので供養のために仏像を刻み、その法名を録し冥福を祈ったものであろう。

村人は子どもの守神として地蔵信仰は深く、今も昔に変わりなく

尊崇し維持管理に当っている。

地　蔵　堂　（大字芋小屋）

『新編会津風土記』に、

「地蔵堂境内東西四間半南北六間年貢地村中にあり創建の年月詳ならず、村民の持なり」

とあって、他の資料によっても創建の年代を明らかにすることはできない。『大沼郡誌』によれば、宝暦五年（一七五五）七月に建立したと記されているが、他の記録には、

「元禄十六年末の春地蔵堂弐間四面ニ村中入用出シ立候、中津川村大工喜右衛門是は年数久敷く捨て置き替え始め成り」（集落誌芋小屋の項参照）。

とあるから元禄十六年（一七〇三）に建立したことは間違いない。とすれば五十二年後に再建したことになる。明治十一年の堂宇に関する調査にも宝暦五年建立としている。文化三年（一八〇六）の書上帳には、二間二尺に二間の堂で南向村民持であると記されている。地蔵屋敷は現在の公民館の位置であったが、昭和四十三年に鎮守の下の広場鉄砲の的場であった現在地に遷座したのである。堂の規模二間四面、祭壇に木彫坐像一木造り御丈四十五センチメートル、全高六十一センチメートルの本尊と、傍らに木彫坐像の子育観音が安置されている。元の境内地は二十八坪民有地で、会式は四月二十四日砂子原神照寺の受持となっている。

地　蔵　堂　（大字大成沢）

『新編会津風土記』に、

「地蔵堂境内東西七間南北五間年貢地村中にあり創建の年代詳ならず村民の持なり」

と記してある。地蔵堂であり今も地蔵堂であるが、草創当時は阿弥陀堂として建立したのである。『会津正統記』によれば近衛天皇の仁平二年（一一五二）、

「会津大沼郡金山谷大成沢邑ニ阿弥陀堂建」

とあるから極めて古く八二〇年余の歴史を持つことになる。阿弥陀堂は浄土教の信仰ということになるが、法然が浄土宗を開いたのが安元元年（一一七五）、親鸞の浄土真宗開宗は元仁元年（一二二四）である。また親鸞の弟子無為信が会津へ来て他力信仰を説いたのは天正六年（一五七八）とされているから、それ以前に浄土教思想がこの地に入ったことになるであろうか。仁平二年建立説を採れば、西山地内においては神の湯下の湯の発見（養老元年・七一七）を除いて他にみられない古い歴史を持つことになる。当村の鎮守住吉明神の祠が建立されたのは文亀三年（一五〇三）でこれよりずっと後代である。前記『正統記』によれば、この阿弥陀堂が文亀三年に地蔵堂と改めたとしている。「大成沢邑阿弥陀堂を地蔵堂と改む」とあることによって明らかであるが、どうして改めたのか当時地蔵信仰が浸透したものか不明である。

宝暦五年（一七五五）の八月に再建された当時の境内地五十五坪民有地で、会式は六月二十四日であった。文化三年（一八〇六）の書上帳に「弐間四面ノ堂西向ニテ村民持」と記されている。昭和初期草屋根葺替工事をしたが、その頃愛宕地蔵尊の額が掲げられていた。

地蔵尊は子供を守る仏でもあるが火防の神でもある。この堂は愛宕地蔵であるから火除け地蔵である。今はトタンに葺替えられ、歴史ある堂が村民の厚い信仰により維持されている。堂の前に念仏供養塔がある。安永二年（一七七三）に大成沢・芋小屋・漆峠村で建立したものである。

太師堂跡地（大字大成沢）

今はその跡地に昔の面影が偲ばれるのであるが、村中に弘法大師を祭った太師堂があった。集落誌「大成沢」の項に記述したのであるが、西山地区にめずらしい真言宗の檀家がある。これは大成沢が赤館荘の荘園の一部として拓かれ、会津高田町（旧旭村長岡）の長福寺と結ばれたのではないかと思われる。弘法大師にまつわる伝説が多く、芋小屋・漆峠に弘法清水があり、この堂跡地の傍らにも清水が湧き出し弘法清水と称している。堂を建て尊像を祭り大師の偉徳を讃仰したのであろう。太師堂は西山地内にめずらしく当村だけであり、牧沢村の太師堂跡は聖徳太子堂であった。

惜しむらくは寛政二年（一七九〇）の大火に類焼し、跡地を留めるのみである。本尊太子像は難を免れ盆地の旭村長岡に遷されたという。

地蔵堂（漆峠）

鈴木利意氏の家には持仏として石像の地蔵菩薩があり、漆峠から高森へ通ずる路傍に祭られていた。雪のために石像が倒れたが、尊像の首が沢越えにみつかった。これは青年の悪戯で、その青年は死亡したと伝えられているが仏の霊験を示したものであろう。

村中に地蔵屋敷があり、間口十二尺、奥行九尺の堂が建てられている。明治初年の火災に堂宇は類焼したが、本尊は難を免れ鈴木金一郎氏家に安置されていた。昭和三十三年に鎮守の改築がなされ、同三十五年に旧神社の建物を移して地蔵堂とし、四月十五日に入仏式を執行した。本尊は木彫坐像であるが、傍らに石像坐像の地蔵尊がある。これは鈴木長作氏家の持仏で、弘法清水の所に祭ったものを堂建立と共に奉遷したのである。

地蔵堂（大字琵琶首）

村の中央二十一坪の境内地に二間に三間の地蔵堂がある。祭壇に木像立像三十八センチメートルの本尊が安置されている。建立年代不明であるが享和三年（一八〇三）の書上帳に、

「地蔵堂一ケ所但二間四方村中請前ニ御座候」

と記されており、明治二年の火災にも難を免れたからそれ以前の建

立となろう。地蔵堂以南の家屋が類焼しなかったので、村人は「火除けの地蔵」として尊崇している。『大沼郡誌』には、

「中ノ川村大字琵琶首字居平に在り境内二十一坪官有地第一種なり会式三月二十四日砂子原西念寺の受持なり」

と記している。『新編会津風土記』には、観音堂については書かれていないが地蔵堂については、

「地蔵堂境内東西五間南北三間年貢地村中にあり草創の初詳ならず村民の持なり」

とある。

観　音　堂　（大字琵琶首）

村の東北、小高い山の中腹に観音堂がある。ここは眺望の地で全村を見渡すことができる。境内地十坪二間に二間半の堂宇に、木像坐像十三センチメートル、全高三十五センチメートルの子育観音が安置されている。この堂宇は神社の本殿と共に一番古い建物とされているが、風土記やその他の記録にも観音堂の名は載っていない。草創年代やその経緯を明らかにすることができない。

観音信仰は共通していえることで七難を除け、二求を望み、また安産と育児を祈願し、観音講が結ばれ八月九日にお篭り、二月十六日・十一月十六日に輪番に講を開き御詠歌をあげる。信仰を通して精神修養と慰安と親睦をかねたものである。小ノ川大乗寺の受持である。

猿　沢　寺　（大字牧沢字居平）

曹洞宗

本尊　地蔵菩薩

猿沢寺は山号を雲峰山と称し、曹洞宗寺院である。『新編会津風土記』には、

「○猿沢寺境内東西二十五間南北二十二間年貢地、村北にあり、山號を峯圓山と云、永井野組松沢村松澤寺の末山なり、開基詳ならず、応永の頃は太子守宗の僧住せりと云、寛文元年天寧村（現在・会津若松市東山町）天寧寺より発呑と云僧来り住し、是より曹洞宗となれり。本尊地蔵客殿に安ず」

猿沢寺の六柱の門（居平）

とある。山号が異なり、また右の文中寛文元年（一六六一）から曹洞宗になったとあるが、次に述べる如く、猿沢寺は、曹洞宗寺院である松沢寺の住職潭龍が当地に来たり、天正九年（一五八一）に堂宇を建立したもので、年代差八〇年あり不可解であるまた、『大沼郡誌』には、

「……峰雲山と号し、本尊は地蔵、松沢村松沢寺末なり、元和元年潭龍和尚の開基とする。境内地二二七坪民有地なり……」

と、元和元年（一六一五）を開基としているが、天正九年説をとることにする。

いま猿沢寺について記述するに当り、『猿沢寺小史』を紹介したい。これは牧沢天野善一氏の筆になるもので、氏は数十年にわたり寺役員を勤めたが、猿沢寺沿革の記録を発願し職を退いてから、松沢寺、滝谷の金龍寺・猿沢寺等数年にわたり資料を収集して執筆、昭和三十七年に完結したものである。時に翁の令八十才であった。『小史』には寺の沿革、歴代住職の業績、檀信徒の寄進等極めて詳細に記述されており、寺宝として後世に遺すべきものであろう。

次に述べることの多くは、この『小史』の一部を抜粋または要約したもので、全てを語り尽せないのを遺憾に思う。寺名のおこりは猿倉村と牧沢村の名をとったものといわれる。

牧沢村に太子堂が建立されたのは応永元年（一三九四）で、堂守良観から良忠まで五代凡そ一七〇年間はこの太子堂堂守が村の仏事を司どっていたといわれる。聖徳太子はわが国仏教興産の祖であるが、この地方では「疣（イボ）取りの大師」として尊崇され、四月二十五日が縁日であった。天正七年（一五七九）頃堂守良忠が病のため仏事ができなくなったので、村名主治郎右衛門は、村民と議り松沢寺に赴き住職の斡せんを要請した。松沢寺五世住職盛庵潭龍は位を支山全良に譲ってこれを第六世住職とし、自ら比の地に来たり（天正七年）治郎右衛門の畑二十五間四方を敷地とし、横五間長八間の堂宇建立に着手した。

湯八木沢名主市兵衛始め近憐信徒の応援を得て天正八年中に竣工、天正九年九月三日に入山した。雲峰山猿沢寺と称し盛庵潭龍を開山とした。歴代住職を一覧にする。

開山第一世　盛庵潭龍大和尚　松沢寺（五世）から
　自　天正九年九月三日
　至　寛永元年十一月十八日
　在位　四十三年
　寛永九年十一月十八日猿沢寺にて寂

当寺住　山屋尊秀大和尚
　自　寛永二年四月十日
　至　寛文十一年八月一日
　在位　四十七年

第二世　壁山栄鐵大和尚　松沢寺（十二世）から
　自　延宝元年三月二十日
　至　元禄九年十一月九日
　在位　二十三年

猿沢寺にて寂

第三世　単翁儀傳大和尚
自　元禄十年二月二十日
至　元禄十四年十二月七日
在位　五年

第四世　泰子芳円大和尚
自　元禄十五年五月三日
至　享保九年八月二十日
在位　二十三年
当寺住　泰山玄歩大和尚
自　享保九年九月七日
至　宝暦五年十一月二十五日
在位　三十二年

第五世　聖翁恵教大和尚　松沢寺（十八世）から
自　宝暦六年四月一日
至　安永八年正月十九日
在位　二十三年

第六世　昌屋大隆大和尚　松沢寺から
自　安永八年三月一日
至　文化四年十一月七日
在位　二十八年
松沢寺二十一世住職となる

第七世　了道覚明大和尚
自　文化五年六月五日
至　文政六年正月二十八日
在位　十五年

第八世　大忍謙道大和尚
自　文政六年八月二十日
至　弘化四年三月十五日
在位　二十四年

第九世　道岳思元大和尚
自　弘化四年十月三日
至　嘉永六年七月十日
在位　六年

第10世　秀雲弟山大和尚
自　嘉永六年十月七日
至　安政五年十一月二十日
在位　五年

第二世　天外道海大和尚
自　安政六年三月八日
至　元治元年四月五日
在位　五年

第三世　大法鐵厳大和尚
自　元治元年十一月三日

至　明治十三年十月二十日
在位　十五年
猿沢寺にて寂

第三世　花山白翁大和尚
自　明治十四年四月五日
至　明治十五年七月十五日
在位　一年四ケ月
兼務　杉野暁山和尚　胄中村真光寺住職
自　明治十五年七月十六日
至　明治十九年八月六日
在位　四年

第四世　活泉恵門大和尚
自　明治十九年八月七日
至　明治三十八年二月十五日
在位　二十年
久保田正徳寺へ転任

第五世　光岳玉全大和尚
自　明治三十八年二月十六日
至　昭和三十年旧二月十五日
在位　五十年
猿沢寺にて寂

第六世（現住）滄海昭道
自　昭和三十年八月二十二日

右にみる如く猿沢寺は松沢寺と因縁極めて深く本末の関係にある。江戸幕府は鎖国と共にキリシタンの禁教を政策とし、宗門の所属を明らかにするため宗門改めを行った。その際牧沢村、猿倉村、湯八木沢村は猿沢寺の檀徒として載せられ檀家として継承されたという。

歴代住職の中には極めて有能な住職もあり、玄歩の時代は享保の飢饉に見舞われ、村民と議り菖蒲沢に築堤し開田事業を行った。また植林を奨励するなど産業振興に寄与した。

五世恵教代に寄進されたものとして、

阿弥陀像　一幅　牧沢・猿倉惣檀中
張披打敷　一通　猿倉太次右衛門
達駄天像　一体　猿倉善左衛門
百万遍念珠　一連　猿倉太次右衛門
幡　二流　牧沢治郎右衛門
幡　二流　猿倉　太次郎右衛門
幡　二流　湯八木　傳三郎
五地如来　五体　湯八木沢村檀中　世話人　原治衛門
吉兵衛
傳蔵

第六世大隆代の寄進
欄間　三間　湯八木沢村念仏講代表　孫七
喜三郎　（以下略）

前頁の寄進によっても判かるように、湯八木沢は昔猿沢寺の檀家であり、今は滝谷金龍寺である。その推移は次の古文書によって知ることができる。

金龍寺三十世住職
自覚宗田首座禅師小ノ川より
慶安元年戊子八月入居
寛文七年丁未九月七日寂ス在中廿年
宗田實弟猿沢寺住職
檀家少ク暮シ兼ルトノコトにて呉れ渡す
八木沢一軒残シ全部トアリ
後書ニハ滝谷桧ノ原不残
鳥屋八人　田代六人
八木沢三人　牧沢男二人
慶安三年ヨリ明治十四年迄弐百十七年
明治十四年九月三十日金龍へ戻ル

猿沢寺の檀数少く湯八木沢はその檀家となったが、明治十四年に金龍寺に復帰したのである。その時金龍寺と十六戸との間に結ばれた契約書がある。

瀧谷村金龍寺エ組合ニ付約定證書

第一条

一、金龍寺組合ニ御貴殿方永々ニ至ル迄御客分之事。（以下略）

約定書は第八条まであり、金龍寺住職阿部至堅、檀頭山内庄吉、戸長目黒雄吾、惣代代理九人の名が見えている。昭和三十九年には信施（しんせ）により本堂・山門・地蔵堂の修復事業を行った。須弥壇には本尊合掌地蔵菩薩像・禅宗の開祖達摩大師・曹洞宗開山道元禅師の像と小さな阿弥陀如来像四体が安置されているが、これは各戸の持仏であったものを奉安したものと思われる。

当山の山門は（四脚門・八脚門あり、脚柱の数による）六柱の門（六脚門）で豪荘（西山地内の寺院には山門がない）で当山の誇りとしているものである（写真参照）。

浅沼常雄氏は猿沢寺を次のように詠んでいる。

「西山に夕日かがやく猿沢寺
　松の木陰よ慈悲の鐘の音」

天正年代から今に至る四〇〇年間、檀信徒の精神生活の拠りどころとして連綿としている。

「幽霊掛軸」の由来

猿沢寺第五世聖翁恵教の入寂後、牧沢村から後任住職の要請をうけた松沢寺第二十世徳音全功は、高弟の大隆を猿沢寺住職に命じた。これが、猿沢寺第六世昌屋大隆和尚である。大隆は才学勝れ、師

僧の信任篤く、松沢寺第二十一世の法燈継承を条件に当寺に赴いたのであった。

大隆は人徳円満にしてよく業に励み檀徒の信望を一身にあつめ、天性の美貌は女性のあこがれであった。湯八木沢村長谷川お順という美女の慕情は激しかったが結ばれる運命ではなく、遂に死を選んだ。大隆は天明三年に松沢寺に帰り二十一世住職となったが（文化四年まで猿沢寺兼務）お順の恋慕の情は亡霊となって夜な夜な松沢寺に現れたという。その姿を垣間みて描いたのが幽霊の掛軸で松沢寺宝物として秘蔵されていたが、後に東山薄浩助氏の所蔵になった。現在はその写が松沢寺の什物となっている。

善　応　寺　（大字四ツ谷字家廻り）

厳前山　浄土宗

本尊　阿弥陀如来

厳前山医王院善応寺と号する。山号は寺の前方に険峻な猿倉嶽あり、『新編会津風土記』に、

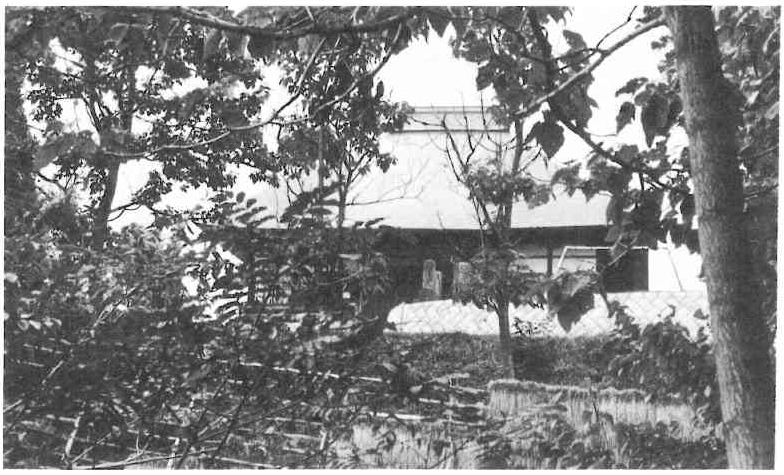
「猿倉嶽村南二十町にあり、岩石壁立し東川に臨めり、険絶にして人跡通ぜず鷲巣を営むことあり」

と形容しているように猿倉嶽を前面にしてこの名が生じたと思われる。また当寺は弘法大師作と伝えられる薬師如来像を本尊としていたところから、医王院と称せられたものである。

延享三年に（一七四六）に記された『善応寺客殿再興之記』によれば、

「昔弘法大師彫刻の薬師如来在り大同年中釈徳一大師来て一宇を建立の霊地則医王院と号せり又側に徳一自ら刻める地蔵菩薩の尊像を安置して幾星霜を経て名のみ残れり」

とあって由緒としては大同年中（八〇六～八一〇）徳一大師建立となっ



善応寺遠景（家の廻り）

僧徳一について述べる余裕はないが、徳一は京都に生れ、若冠にして東国に入り関東・東北に建立したとされる寺院は多いが、確認されているのは筑波山中禅寺と会津恵日寺の二ケ寺だけである。しかし徳一の開基と称するものは他にもある。奈良朝から平安朝期にかけて新仏教として最澄（伝教大師）・空海（弘法大師）が活躍す

るが、その最澄、空海に論争を挑んだ学僧である。徳一開基と伝えられる寺は会津に九ケ寺あるが、善応寺の名は見えない。

村の東方三〇〇メートル程の所に高森山と海老山の中間に箱倉という柵址があって、今は畑になっているが永禄年間（一五五八～一五七〇）に小嶋越中詮清が藩鎮として住したと伝えられている。

いつの時代に建立されたのか、最初の堂宇は現在地ではなく村の後方で、現在も寺屋敷跡があり石の水舟もある。その当時は高厳寺と称したとも伝えられる。その堂宇も幾星霜を経て荒廃し、小嶋越中詮清が大破の一宇を再興し善応寺と称した。天正年中（一五七三～一五九二）国乱れ世移り小島氏の子孫も諸所に分散し、或は村吏となり、或は民間に入って農夫の身となり、故に寺はいつとなく無縁となり、有るかないかのようになり代々の住僧も分散して荒廃するに至った。

『新編会津風土記』には、

「善応寺境内東西十三間南北十八間年貢地村中にあり山号を厳前山云府下徒町一乗寺の末山浄土宗なり慶長十八年鎮西派の沙門善龍と云者創建せり本尊阿弥陀客殿に安ず」

としている。また、『大沼郡誌』には、

「東川村大字四ツ谷旧遅越戸に在り、厳前山と号し、本尊は阿弥陀、若松市千石町一乗寺末にして、小嶋越中詮清の開基なり、境内地二百四十三坪、民有地なり、持添地一筆あり」

と記している。慶長十八年は一六一三年で鎮西派は西山派に対し浄土宗の一派である。

再興の度毎に古檀小嶋掃部助の子孫は代々本願主となり、諸檀家心を合せ大業を成就したのである。堪蓮社寂誉春閭和尚（当寺中興・墓石あり　元禄七年三月九日寂）の時、鳥屋村太郎兵衛が深く帰依し阿弥陀如来の尊像一尺八寸の立像を造立し寄進したが、後住万蓮社良樓柳音は、小仏にして客殿に相応しくないとして他に遷したという。現存の本尊阿弥陀如来坐像は柳音代正徳六年（一七一六）に造立し三月十五日に開眼供養したものである。

当時の什宝は悉く柳音代に成ったもので寂誉と共に当寺の中興の祖というべきである。

時経て堂宇風雨にさらし本願主小嶋一統並びに檀越（だんおち）心を合せ再興せんことを語らい、寛保三年（一七四三）二月より延享三年（一七四六）にかけ六間半に七間の一宇を造立したのである。

文久元年（一八六一）の頃から一時無住になり、従前の過去帳は本寺一乗寺へ送られ明治十六年新たに調整された。その時の世話人は菊地義平であった。檀家は越渡・高森・中屋敷で檀数少く、明治中頃より住職常住したが大正末年に再び無住となり現在に至っている。

法宝物は、

阿弥陀如来像　木彫坐像　像高二尺一寸　全高六尺

薬師如来像　木彫坐像　弘法大師作と伝えている。

地蔵菩薩像　木彫立像　徳一大師作と伝えている。

「黒谷法然上人一代記」寛文六年（一六六六）版十冊の中三冊欠冊

西念寺　　柳津町大字砂子原

本尊　阿弥陀如来

浄土真宗本願寺派紫藤山西念寺と言う。浄土真宗は親鸞が開宗した浄土門念宗で、門徒宗また一向宗とも呼ばれている。一向宗とは「一向専念弥陀名号」と経文にあるように、「一向に弥陀の名号を専念する」という教義から生じた俗称である。

西念寺の祖は山ノ内左衛門助信憲と言い、上杉長門守信憲末上杉安房守憲忠の弟房顕の子で鎌倉在住の武士であった。通史で述べられたように享徳三年（一四五四）十二月鎌倉山之内乱の時上杉憲忠が討死したので、康正二年（一四五六）逃れて砂子原に来たり山ノ内を名乗り（註、鎌倉の地名をとったと言う）砂子原を居城とし領主として永楽七拾貫文を領し会津太守葦名盛氏の旗下に属した。

信憲の守本尊擁護の神体は、

春日大明神　藤原氏擁護神

奉ル勧請ニ于此地ニ

居城之北一盃館

稲荷大明神　居城之南

十一面観音像　信憲守本尊　一盃館

釈迦之像　当所甚照庵ニ寄進安置ス

薬師之像　松澤村松澤寺ニ安置　寄附スニ永楽五貫文ヲ

右相州鎌倉ヨリ守来而奉祠ニス于當国ニ（註、山内氏家系図）

とあり他に鎌倉から供奉し来たったと伝えられる仏像として阿弥陀如来像（木像）が現存する。

信憲から信氏・信俊・信家まで四代黒川城主葦名に仕えていたが信家の時即ち天正十七年（一五八九）伊達政宗と葦名義廣の合戦あり、山ノ内首藤刑部大輔氏勝を先立として山内七黨と共に城主葦名に加勢せんとして発向したが葦名は遂に敗戦し伊達の支配となった。

「（前略）同年八月山之内七黨モ所々ニ分散シ或ハ政宗ニ帰服ス因レ茲砂子原ニ討手ヲ向フヘキ所松本打月斎旧知以相止ム、雖レ然山之内一家ノ因信家迄四代葦名高恩之末ト云意味不レ安此頃会津當麻□ノ文保ト富田美作カ家老角弥ト云者二人行脚ノ僧ト成リ諸所隠謀之事顕レ政宗重テ砂子原ニ打手ヲ遣ス依レ之信家自害シ執権課ニシテ窪田越中ニ送ニ首於政宗ニ于時天正十七年己未十二月廿七日（後略）」　（註、山内家系図）

とあるように、山内四郎左衛門尉信家は自害しその首級は政宗の許に届けられこうして武士としての四代は終末を遂げた。このことがあって人の世の無常、無情を感じ仏門に帰依し一宇を建立した。これが正善である。天正十八年（一五九〇）のことと伝えている。「会津正統記」には、「（前略）砂子原邑の村主上杉丹波憲景の女を福証寺（註、会津若松市）の二男栄観が妻として村に一宇を建てた。一向宗也。西念寺と号す」とあるが詳かでない。

「新編会津風土記」には、「西念寺境内東西十一間、南北三十五間年貢地村中にあり、浄土真宗西派府下千軒道福証寺の末山なり、元和二年正善と云僧創建す。本尊弥陀客殿に安ず」と記している。

天正十八年（一五九〇）と元和二年（一六一六）は二十六年の年差がありこれを解明する資料はない。縁起によれば天正十八年正善を開基としている。

甚照庵については神照寺の項に詳述する。松澤寺は松沢村にあり山号を宝珠山と言い越後国村上耕雲寺の末山である。肅芳という僧が創建した。天正十八年（註、天正十八年は伊達政宗が黒川の城主であった）に伊達政宗が三貫文の地を寄進したという由緒ある寺院で、牧沢の猿澤寺の本寺でもある。

西念寺歴代住職

第　一世　正善　　第　七世　恵教
第　二世　宗因　　第　八世　門教
第　三世　西伝　　第　九世　栄教
第　四世　了智　　第　十世　泰教
第　五世　了円　　第十一世　教観
第　六世　教円　　第十二世　諦教（現在）

本願寺教団の宗制改革により地方寺院との本山・末寺の関係は廃され浄土真宗においては全ての寺院が本願寺直属の末寺となっている。これを直末という。天正十八年開基以来現代に僅か十二代であるが浄土真宗の法統（住職継承）は世襲制となっているからである。当初砂子原字居平□□□番地（現西山公民館敷地）に建立されたが五世了円代に類焼したので火難を避けるために現在地に遷したという。浄土真宗は、阿弥陀如来の絶対他力に帰依する念仏救済の教義で庶民に理解され易く布教伝道が生命とされ篤信の檀徒が多い。

昭和十一年に再調製された西念寺過去帖の序文に「抑明治四十四年四月二十四日旧三月二十六日の劫火は稀有の大火にして民家僅に二、三戸を残し神社仏閣悉く焼失す、当時亦類焼の厄に罹り本堂庫裡土蔵灰烬に帰す。五尊様は御避難為し得たるも創草已来の旧記文書と共に過去帖を焼失す。（後略）」とある。明治四十四年（一九二〇）は第十一世教観の代である。この時の劫火は忽ちにして砂子原部落を火の海に包み恰も阿修羅のようであったと古老はその恐ろしさを言い伝えている。右序文の如く西念寺亦類焼し本堂庫裡土蔵まで灰烬となった。教観は直ちに再建に着手し檀信徒の懇命により大正三年（一九一四）再建成ったのが現在の堂宇である。檀家は昭和村小ノ川・両原・喰丸・柳津町出倉にのび曽っては古屋敷もそうであった。砂子原部落に少ないのは開基当時の経緯から推察される。

法宝物の主なものは、

宗祖親鸞見真大師絵像　元和七年（一六二一）本願寺准如上人の裏書あり

本尊阿弥陀如来像（木像）享保十六年（一七三一）

阿弥陀如来像　（木像）

聖徳太子像　（木像）

余間壇に安置されている阿弥陀如来像は、山内家の祖が鎌倉から供奉したものと伝えており線描は美しく木彫として勝れていると思われるが仏師年代不詳である。

阿弥陀如来他画像六幅　嘉永四年（一八五一）

本尊御脇侍として観音・勢至像、左、余間壇には円光大師・子安観音像が安置されている。

仏具は直径四一・五センチの鉦鼓あり、元禄十四年（一七〇一）のもので、

「奉寄進遅越渡村善応寺仏前願以此功徳普一切含霊皆供入仏道為一誉上人並父母逆修菩提也施主雷一誉柳音代」

の刻名あり、また浄土宗であるから百万遍もあり、それに用いた鉦（かね）がある。

「金山谷之内遅越渡村百萬遍講中享保廿乙卯天九月吉日」

と刻まれている。

神　照　寺　（大字砂子原字上林）

湯瀧山　浄土宗　本山知恩院

本尊　阿弥陀如来

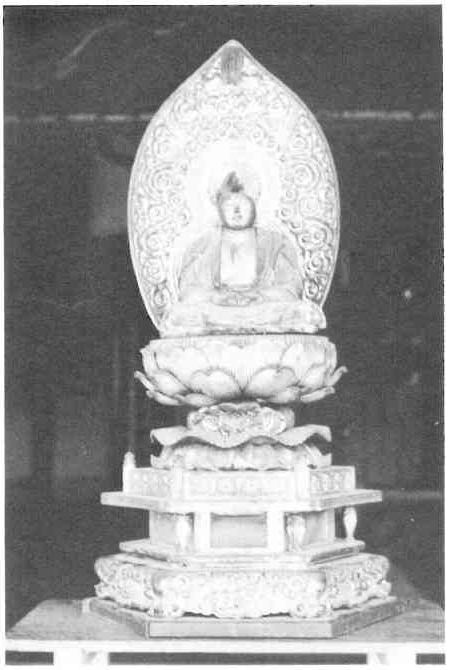
湯瀧山神照寺と号し、浄土宗知恩院を本山とする。『新編会津風土記』には、

「神照寺東西十五間南北九間年貢地村中にあり浄土宗湯瀧山と号す、府下五之町高巌寺の末山なり、天文元年（一五三二）玄誉と云僧開基せり」

とあり、『大沼郡誌』には、

「中ノ川村砂子原に在り、湯瀧山と号し本尊は弥陀、若松市下五之町高巌寺末なり、境内地百四十四坪民有地持添地田畑七筆あり」

と記されている。



神照寺・余間壇の阿弥陀如来像（上林）
頭部が焼損している。

山号はいつの時代にか湯瀧山と称したことがあった。「琵照庵昔は神松庵今琵照寺」（山内氏家系図）とあるようにその名称に推移あり今は神照寺という。

天文元年（一五三二）の創建当時は砂子原字居平二六三番地（旧役場西山支所の位置）で校庭は神照寺の墓地であった。明治三十七年の『砂子原区永続件協議書』の中に、

「明治参拾五年決議に依り小学校運動場として神照寺畑貸渡料金の内へ壱ケ年金壱円五拾銭宛を寄附する事」

と記されている。

『砂子原史蹟考』には、『高巌寺古史』の中に、

「長禄三年河沼郡青木村出身の笈州上人が開基し湯瀧山神照寺と名づけ檀家二十七戸、僧粛白を初代住職とした」

と記されていると述べているが、長禄三年は一四五九年であり七十三年間の年差を解明する資料はない。また『会津略年表』に、

「黒川盛道山高巌寺（笈伝）文明六年（一四七四）に建立された」

とあり、これが真実とすれば本寺末寺の関係から考えると長禄三年説は矛盾する。然し、山内家の祖山内左衛門助信憲が鎌倉から供奉し来たった守本尊釈迦如来之像を寄進したのが長禄元年であるから長禄年間（一四五七～一四六〇）以前に庵寺としてあったことが推定される。

草創以来の経緯は詳かでない。山内四郎左衛門信家が之を再興し寺領として田地一五〇刈（註、後記）を寄進、更に本尊脇侍二菩薩の像を寄進安置した。然し天正年中（一五七三～一五九二）回禄の災に罹り灰烬に帰した。乱世の時に当り、因縁熟さず復興ならずして多年を経過したが、正徳四年（一七一四）の夏、山内清左衛門蕃信が、会津の仏師右近に命じて新たに二菩薩の像を彫刻せしめこれを寄進、同年八月十日に安置入仏供養を執行した。

阿弥陀如来像（木彫坐像）の台座に、

「大宮方定朝六十三代堀左近定勝之を彫む」

とあり、また、

「奥州会津東城西大沼郡金山谷砂子原村湯瀧山甚照寺信連社正誉河伝和尚藤原祖洸山ノ内清左衛門信光並甚照寺　宝永二乙酉正月二十五日」

と記名がある。宝永二年は一七〇五年である。寄進者山ノ内清左衛門は宝永四年六月十四日に死亡、法名は照誉道夏居士、その墓石が神の湯の墓地内に現存する。

明治十八年十一月二十八日の夜半の火災により本堂庫裡灰烬となり、過去帳・什物等焼失したが、本尊如来像一体は大島芳次郎の決死の搬出により難を免れた。その後三十年間堂宇の再興ならずして本尊は観音堂や西念寺に安置された。明治四十四年砂子原大火の時池に投入されて、本尊の頭部が焼損した。法宝物として右脇壇に安置されている。

法宝物は、

阿弥陀如来像　寄木造　像高二十七センチメートル

弥陀・観音・勢至の三尊木像

百万遍の大珠数

地獄（二幅）極楽（二幅）の掛図

円光大師木像

この円光大師像には、

「御城下瀧沢町仏師森行仕直し　檀頭世話　渡部健之助　時住寺頂山代　干時慶応元年丑ノ九月」

と記名がある。慶応元年（一八六五）に修理をした記録である。

百万遍は、南無阿弥陀仏の名号を百万遍称え浄土往生を願う行事で、昭和初期までは子供たちが称名しながら往来を練り歩いたので

ある。

宗教行事の最も重要なものは、浄土宗開山法然（円光大師）の供養をする法要で御忌と称し、毎年盛大に執行されている。

過去帳焼失によって歴代住職不明であり、無住の時代もあった。

玄誉

…

小林周禅

小原良賢

奥田□□

田中龍石

斎藤賢明

伊藤界融（現住）三十八代と言われている。

（註）『刈』

古代においては田を計測するのに町数あるいは稲の刈束数をもって称した。近世石高制となってからも地方によっては何十束刈の地というように呼び習わしたところがある。佐渡では天正十七年（一五八九）以後上杉氏が領知した時代に幾刈の地として村高などを示しており、一〇〇刈は京升で八斗四升に当たるという。石高が米穀の石数で、貫高が銭貨の貫文で表わされた。田積計量の方法である。一〇〇刈は一反に相当する。中世以降北陸・奥羽地方において用いられた。石高を付する際の過渡的便法としたものではないかといわれている（辞典）。

真　光　寺　（大字胄中）

長華山　曹洞宗

本尊　十一面観世音菩薩

真　光　寺　（胄中）

長華山真光寺と号する。『旧事雑考』に、

「天文十六年丁未曹洞徒宗岑（峯）建二於大沼郡蕪中村真光寺一令二天寧寺住覧渓為二勧請開山一」

と記してあるが『大沼郡誌』には、

「真光寺曹洞宗中ノ川村大字砂子原字胄

中に在り長華山と号本尊は観世音、北会津郡東山村天寧寺末なり。天文元年八月八日蘭渓善尊の開山にして寛永二十年三月廿八日の建立なり。寺宝に大磐若経六百巻あり、境内地百四十五坪民有地なり持添地畑六筆」

とあり、更に『新編会津風土記』には、

「開基の僧を宗岑と云う。天文十六年に寂すと云う」

と記されている。

当山開基の年代並びに開基の僧について、前掲の三書によれば、「天文十六年（一五四七）に宗岑によって真光寺が建てられた」と述べ「天文十六年に寂した」と云い、また「天文元年（一五三二）蘭渓善尊が開山した」とあり、統一性を欠きどれが正しい記録であるか判然しない。当時の過去帳には次のように記録されている。

「開基　宗岑大和尚　天文元年入山、天文十六年七月十七日寂
開山　蘭渓善尊大和尚　寛永二十年三月十一日入山、延宝五年六月十三日寂」

従って天文元年開基の僧を宗岑と云い、蘭渓善尊が開山したと考えてよいであろう。

蘭渓善尊大和尚は天寧寺村の萬松山天寧寺第十五世であったが、寛永二十年（一六四三）に入山して真光寺を開山した。宗岑が没してから一〇〇年後のことである。

真光寺の本寺天寧寺は越後国村上耕雲寺の末山で、応永二十八年（一四二一）葦名左近将監盛信が建立したもので開山の僧を傑堂と云う。領主葦名盛氏は深くこれに帰依し永楽百貫文を寄進した。文禄元年（一五九二）蒲生氏郷は岡左内に命じて当寺を修造した。第十五世賢（蘭）渓諱善善尊の時、葦名義広の孫平三郎盛俊は秋田角館から使を馳せ、瑞雲院のために寺号及び法脈を請い瑞雲院を天寧寺と改め、末寺となった。従って真光寺と秋田角館の天寧寺は共に蘭渓善尊の開山である。領主蒲生家・加藤家共に寺領として一〇〇石を寄進している。末寺三十三ケ寺を有する会津曹洞一派の本山というべき格式ある寺院である（『風土記』）。

真光寺の堂宇は永禄の年代（一五五八～一五七〇）に建立されたと云われるが現存の建物は寛永二十年（一六四三）三月二十八日の建立である。『新編会津風土記』に古蹟として、

「館迹　村西六町三十間余、館山と云山の八分目にあり東西七十間南北八十間何人の住せしにや詳ならず」

とある。この館迹には現在も土台石がある。村人は阿闍寺といいならわし羽賀入道が住せしとも伝え、真光寺の古蹟とも伝えているが確証はない。

山号を長華山（長花山）という。その由来は、村西にある館山には春ともなると古い山藤の花が館を覆いかくす程に咲き乱れるところから、長華山と名づけられたといい伝えている。

真光寺の歴代住職を過去帳によって記すと次の通りである。

開基　宗岑大和尚　　天文元年入山
　　天文十六年七月十七日寂

開山　蘭渓善尊大和尚　寛永二十年三月十日入山
延宝五年六月十三日寂

中興　宝山智鑑大和尚　延宝五年六月二十日入山
享保十年七月二十八日寂

二世　山應宜𢦏大和尚　享保元年七月二十五日入山
享保十六年四月十日寂

三世　柏宗玄肯大和尚　享保十六年五月十一日入山
宝暦二年九月二十四日寂

四世　大溟思孝大和尚　宝暦二年十月二十日入山
安永四年八月八日寂

五世　大円孤道大和尚　安永四年九月十五日入山
寛政三年六月三日寂

六世　桃嶽恵林大和尚　寛政三年七月二十一日入山
文化七年八月晦日寂

七世　兀山真翁大和尚　文化七年九月七日入山
文政元年十月十五日寂

八世　大鳳哲雄大和尚　文政元年十一月十九日入山
文政七年十一月二十六日寂

九世　梵海瑞音大和尚　文政七年十二月九日入山
天保三年三月十八日寂

十世　白翁台明大和尚　天保三年四月十四日入山
天保十一年十月二十七日寂

一一世　祖苗光山大和尚　天保十一年十一月二十七日入山
嘉永四年二月二十三日寂

一二世　大唯祖明大和尚　嘉永四年六月三日入山
大谷円福寺へ転住

一三世　義三廓勇大和尚　文久九年三月二十六日入山
越後中蒲原郡千原村高岳寺へ転住

一四世　大峰祖山大和尚　明治二年三月二十二日入山
越後南蒲原郡見附町へ隠居

一五世　亮山智玉大和尚　明治七年七月十日入山
越後南蒲原郡塚自村大栄寺へ転住

一六世　曜天雲琮大和尚　明治十五年六月越後中蒲原郡
笹ノ町村永福寺へ転住

一七世　大雲暁山大和尚　明治十五年六月入山
越後古志郡濁沢村阿弥陀へ転住

一八世　智月光玉大和尚　明治二十三年九月十二日入山
大正十四年三月二日寂

一九世　禹川国雄大和尚　大正十四年三月五日入山
山梨県中巨摩郡稲積村廣運寺へ転住

二〇世　是法無三大和尚　昭和二年五月二十日入山
新潟県中蒲原郡見附町嶺崎庵へ転住

二一世　泰山洞洲大和尚　昭和四年旧三月十五日入山
昭和十二年西蒲原郡弥彦村字観音寺へ

転住
昭和十二年十一月入山
昭和二十六年西蒲原郡弥彦村字観音寺へ転住

三世　物外徹三大和尚
近藤微山大和尚　昭和二十七年入山　住名なし
浅井学山大和尚　昭和二十八年　住名なし
昭和三十二年より兼務
野老沢真光寺住職

三世　新井田清光（現住）

真光寺の寺紋は菊水である。これは明徳二年（一三九一）に明徳の乱があり楠木正成の孫傑堂能勝は、敵の流れ矢に当って其の膝を負傷し跛躄（びっと）となって出家し、応永二十八年に会津天寧寺を創建したのである（前記）。天寧寺開基の僧が楠木正成の孫に当る傑堂であるから天寧寺の寺紋が菊水であり、真光寺は天寧寺第十五世蘭渓の開山であるから同じく菊水であるといわれている。

檀家は胄中・黒沢・大成沢に散在する。大成沢の六戸は会津高田町大字旭杉原長福寺の檀家であるが、寛保の年代（一七四一～一七四三）から真光寺が仏事を兼務したようである。過去帳によれば大成沢と思われる名前が一〇七人に及んでいる。

胄中村名主二瓶弥惣右門が、公儀御触並びに格文を書写した覚帳の中に、天保三年（一八三二）真光寺において江湖を執行したという記録があるので紹介する。

天保三辰年閏十一月
長花山真光寺江湖
堂頭　瑞音大和尚
首座　野尻組佐倉村
観音寺長老
一、金五両　振舞金
外壱分三歳三ッ椀代
メ
内　黒沢村
壱両三分壱歳　旦中
一、金三両弐分弐歳　村旦中
内
壱分弐歳　二瓶弥惣右門
壱分弐歳　万次郎
壱分弐歳　十右門
壱分　七　衛
壱分　久太郎
三歳　徳太郎
三歳　音之亟
三歳　三　吉
弐歳　太　吉
弐歳　太左衛門

弐歳　庄太郎
弐歳　惣右門
弐歳　菊　八
弐歳　軍　次
弐歳　太　蔵
弐歳　弥平次
弐歳　富　吉
弐歳　丑太郎
弐歳　曽　平
弐歳　林　蔵
壱歳　由　蔵
壱歳　幸次郎
壱歳　忠　平
壱歳　吉次郎

メ三両弐分弐歳

江湖とは江湖会のことで禅宗、特に曹洞宗において、四方の僧を集め一定期間外出せず一室に籠って修行する行事である。

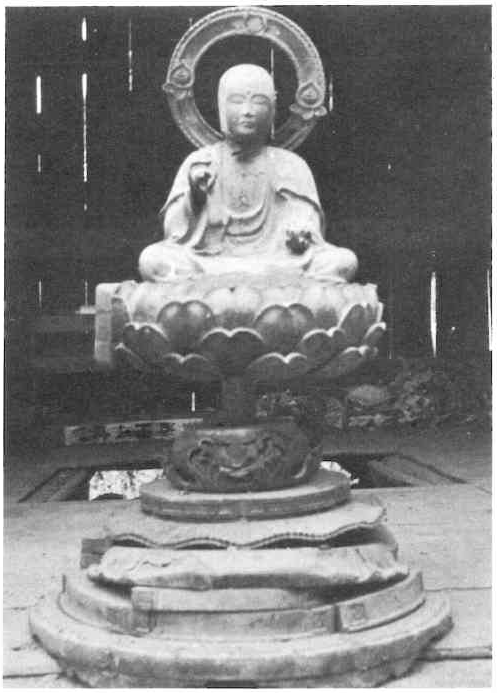
法宝物としては『大沼郡誌』にも「大般若経六百巻あり」と記されている。大磐若経六百巻は、室町将軍足利尊氏が我が子基氏に命じて開版させたといわれる。当時の磐若経も基氏の原版によるもので、有名寺院の寺宝であったものを廃寺になる時譲り受けたといわれる。明治十三年春のことで、その時の総檀中の寄進者の記録がある。

宗教行事の最大なものは大磐若会である。俗に「オダイハンニヤ」ともいう。以前は毎年旧三月十五日に執行された。三～四十年前までは近郷の老若男女が晴着姿で参詣し露天商も立つ程であったという。今は四月十五日頃に執行されている。

円　明　寺　（大字久保田字居平乙大峯山）

峯清山　曹洞宗
本尊　釈迦如来

大峯に円明寺があったことは西山地区の人にも余り知られていな



円明寺本尊（大嶺）

い。凡そ一五〇年前に無住となり檀家数も少く、寺院の維持管理も思うに委せず廃寺となって、今はその寺屋敷と村中に建てられた小堂にその名残を留めている。『新編会津風土記』には、

「円明寺境内東西十五間南北五間年貢地村中にあり曹洞宗峯清山と号す天寧村天寧寺の末山なり開基詳ならず慶長十六年天寧寺の僧侶宗龍と云者来り住せり此時今の寺号山号に改めせしと云旧号詳ならず本尊釈迦客殿に安ず」

とあり、また『大沼郡誌』には、

「円明寺浄土宗東川村大字久保田字大嶺に在り峯清山と号し本尊は釈迦北会津郡東山村天寧寺末山なり境内地五十九坪民有地なり」

と記されている。浄土宗とあるは曹洞宗の誤りであろう。

山号は、高台に位置し自然の清浄な大峯村の名に因んだものといわれている。寺号は延命を用いた一時期もあったが正しくは円明である。『会津正統記』には、

「応永三年会津大沼郡金山谷大嶺邑に曹洞宗円明寺建」

とあり、応永三年は一三九六年であるから五八〇年の歴史がある。寺院に関する記録乏しく開基以来の経緯を明らかにすることができない。

『新編会津風土記』によれば、天寧寺の末山とあるから胄中真光寺と本寺を同じくする。真光寺で述べたところであるが、天寧寺は三十有余の末寺があったのでその一つが円明寺である。慶長十六年は一六一一年に相当する。その後の歴代住職名も不明である。大峯は寛文年間（一六六一～一六七二）は家数十四軒、延宝九年（天和元年一六八一）には十二軒、その後二十五軒になった時代もあったが、寺の財産は今は村の共有となった〇・一ヘクタールの雑木山があるだけで、寺院の維持困難となり無住となったものであろう。古老の言によれば、無住の後、天寧寺や昭和村下中津川正法寺の住職が仏事を行った時代もあり、一時軽井沢慶福寺の檀家になったがその後滝谷金竜寺の預りになったと言う。

昭和初期までは本末の関係ならずとも天寧寺と円明寺の関係があったことは昭和九年の文書によって明らかである。

古老の言によれば円明寺は廃寺となり、寺籍が移され北海道に峯清山円明寺が建てられたという。

建立の年代不明であるが間口三間半、奥行五間の本堂があり祭壇には像高二十四センチメートル、全高六十四センチメートルの木彫坐像釈迦如来像と木彫観音像と木彫地蔵が安置されていた。地蔵尊は「目を癒す地蔵・疣とり地蔵」ともいわれ、旧四月十五日の祭礼には西山地区から多数の参詣があった。無住の後も旧三月十七日と旧四月十六日の夜には、檀信徒や親類縁者が参籠し御詠歌をするのが慣わしで、露天商も立つ程に賑わい信仰を基調とするものではあったが、また村の社交娯楽の場でもあったのである。昭和二十年代まで続けられたが今はない。

明治五年に学制が布かれてから本堂を学校として村人が授業を行い、昭和三十七年久保田小学校六峯季節分校が本堂内に開設された。

堂宇は荒廃し檀信徒相議り村の中央に間口九尺、奥行二間の小堂を建てこれに三尊を奉安したのである。

昭和四十四年の豪雪により本堂倒壊し、今は空しく寺跡のみが昔の歴史を物語っている。

小堂の道路を距てて正面に子安観音の石の立像がある。像高六十六センチメートル、全高一六七センチメートル、天明六年（一七八六）六月造立のもので女人講中の刻名が判然としている。安産を祈念し尊信をあつめ村の象徴ともなっている。

正　徳　寺　（大字久保田）

田松山　浄土宗　本山知恩院

本尊　阿弥陀如来

『新編会津風土記』には、

「正徳寺境内東西十五間南北十三間年貢地村中にあり永禄十年弘繁と云僧下野国那須より来て草創し田松山と号す。浄土宗府下西名子屋町秀翁寺の末山なり、本尊弥陀客殿に安ず」

とあり、『大沼郡誌』には、

「正徳寺浄土宗東川村大字久保田字田代に在り、田松山と号し本尊は弥陀、若松市西名子屋町秀翁寺末なり境内地百六十五坪民有地なり持添地田地一筆あり」

と記されている。

山号の由来は、田代村の字椚地内に松の老木八本あり、倒木により昭和年代には三本になったがこの地名と松に因んで田松山と称したといわれる。寺号は正徳年間に改築したので正徳寺としたといわれているが、改築を証する資料はない。また永禄十年は一五六七年で、正徳年間は一七一一～一七一六年で一四五年間の年代差があり不可解である。

正　徳　寺　（久保田）

秀翁寺は、針西山と号し会津若松市大町融通寺の末山で浄土宗、文禄二年（一五九三）良善と云う僧が越州より来て建立したと『新編会津風土記』に見えている。正徳寺の草創が永禄十年とすれば本寺の秀翁寺より二十六年早く草創されたことになる。

いつの時代にか本堂焼失し、現在の堂宇は銀山にあった寺院（不詳）が廃絶となりその庫裡の材料をもって改築したものという。

会津若松市融通寺（浄土宗）の預り寺となった本末の時代もあり融通寺住職が来山し仏事供養が行われた。明治三十三年から無住となり現在は砂子原神照寺の預り寺となっている。久保田全戸と松ケ下が檀家であったともいわれ、以前は砂子原西念寺（浄土真宗・一向宗とも云う）・滝谷金龍寺（臨済宗）の檀家があったことが墓石によって判明される。

昭和四十四年堂宇改修、十畳一間を客殿とし本尊と観音・勢至菩薩、開山円光大師（法然）像・聖徳太子像・子育観音像が安置されている。また法宝物は当地方に珍らしい釈迦涅槃の掛軸、これは文化二年（一八〇五）佐藤郡造が父母菩提のために寄進したものである。昭和四十七年に再表装された。また宝暦十一年（一七六一）七月に鋳造された半鐘（口径一尺二寸、高さ二尺、重さ二十貫）があり左の刻銘がある。

干時　宝暦十一辛巳歳
治工　七月　早山掃部介
安次
奉寄進半鐘一釣
為惣檀中他旦那二世
菩提
奥州大沼郡金山谷
田代村田松山正徳寺

什物　十二世潅誉代
若松清林寺
代々檀頭
佐藤多右衛門
田代佐藤惣次右門
星　喜兵衛
南
寄進世話人　江川文六
天野仁兵衛
松ケ下
小野太良兵衛
小野　長吉
中村
田崎市郎治
田崎仁兵衛

宗教行事としては釈迦涅槃会（二月十五日）念仏講がある。涅槃会は、釈迦涅槃の掛軸を掲げ礼拝する。念仏講は、正月十六日・春秋彼岸の中日・盂蘭盆の十六日に称名念仏と御詠歌を誦唱する。古くは百万遍の行事が旧二月二日に行われたが今はない。百万遍は浄土宗の教義に基づくもので、南無阿弥陀の名号を百万遍誦唱することによって浄土往生が成就するとして往生を欣求するものである。

南坪地内に天文年間の古い墓石がある。正面は欠損して判読でき

ない。「天文十五丙午種法印墓九月十三日」と刻まれている。天文十五年（一五四六）は四二八年前になる。これは小野武義家の墓で、小野家は代々法印で現在でも祈祷の間に祭壇があり正月二十七日を例祭としている。

三十三観世音　（大字久保田）

久保田村の東方およそ五〇〇メートル、俗に観音山という。一周三〇〇メートルの山の中腹の周囲に石像観音菩薩三十三体が安置されている。像の裏または台座に寄進者名が彫られてあり、観世音の半肉体彫、舟形光背にて表現されている。三十三番目結びの像の台座には文政元年（一八一八）の紀年銘、世話人松三郎・龍助・龍七縫之助・仙治良の五人の名がある。

像相は聖観音・十一面観音・如意輪観音・千手観音・また十字架のマリア観音・特に婦人信仰の中心となる子安観音等妙法蓮華経普門品第二十五の経文其のままの功徳を現わしている。

観世音菩薩の御利益は、勿論現世利益で七難八苦を災除し二求を与えるといわれる。二求とは「勇ましき男子」「やさしき女子」を信心することによってそれを授け給うとの教えである。

ここ久保田はへき遠の地にして産婆も医者も昔は程遠く難産のために他界した人が少くない。久保田字中村の地蔵は安山岩の豊富な埋蔵地であり、石工もまた幾人かの名匠がいたものと考えられる。この条件のもとにここに観音を造営し安産を祈念して奉祀されたのである。旧三月十七日は観音様の祭、村の婦人はもとより他に嫁ぎし者もこの日は賑々しく参詣し、一人で三十三回廻り拝むところ十人で廻れば三回で祈りが済み、この連帯感の絆によって創始の文政より一五〇年間信仰を続けてきた尊い民俗的文化遺産である。今後も永久に続くよう村一同の協力によって存続させたいものである。

子育地蔵　（大字久保田松ケ下）

松ケ下から銀山街道への登り口路傍に立っている。この地蔵尊に次のいわれがある。

木ノ戸栄一氏は幼少の頃中風性の病あり、成長が案じられていたという。父栄伍氏は心を砕きいろいろな療法を試みたがその効なく、当時この地方に往き来した占師に請うたところ、占師曰く、

「あなたの南東五十メートルの地点に石地蔵が埋没している。尊像が光を仰がんとしているから早く掘り起し尊崇せよ」

と、栄伍氏は急ぎ鍬をあてると果たせるかな一体の地蔵尊が勿体なくも土に埋もれていた。

幾十年の間土中にあったものであろうか。これを供奉し屋敷の裏手上方に屋敷神として奉祀した。霊験あらたかにしてそれ以来栄一氏の病は目にみえて快方に向い健康になったという。しかし鎮座の場所が、同じく屋敷神として古来より祭ってあった稲荷神の上方であったため稲荷神の怒りに触れたので、その下方現在地に遷座したのだという。

木ノ戸家の守神として管理してきたが、村人はこれを「子育地蔵」と名づけ一般に尊崇されている。

延命地蔵・追分地蔵

村の西端田代への旧道と湯八木沢への道の分岐点に二体の石地蔵尊が立っている。その一つは追分地蔵と呼ばれている。その側面に「右砂子原道・左田代道」と刻まれて道行く人の道標となっていたからである。この道路は県道で砂子原方面から銀山を経て高田へ通ずる主要道路であった。享保十九年（一七三四）に立てられたものである。その傍らに石地蔵あり。全高七十三センチメートル、「延命地蔵」の刻名がある。往来の激しかった昔、旅人に語りかけまた旅の安全を祈ったものであろう。造立年代不明である。

観　音　堂　（大字五畳敷）

五畳敷から牧沢に通ずる町道の村はずれに一見堂宇とは思われないような建物がある。これが観音堂である。庶民の生活に密着した観音信仰は古くからこの村にも行われていた。二十五級の石堂を登ると、さ程広くない平地があり、石仏や巳待供養・伊勢宮・文珠菩薩が奉祀されている。石仏三体は現在地より三メートル位下方にあったが、町道の拡幅工事のため昭和四十五年七月十七日に現在地に奉遷した。

石像の観音菩薩は享保十八年（一七三三）六月十七日に造立したもので二〇〇余年間野仏であった。昭和四十八年九月村人は団子湯の近くの字村の上にあった間口二間半、奥行四間の郷倉を解体し現在地に移築してこれを観音堂とした。翌四十九年四月婦人会が中心となり、本誌編集委員大越大雄氏の肝煎で、御丈二十五センチメートル、全高三十八センチメートルの金仏観音像を勧請し、開眼供養を執り行った。以来全戸が講を結び毎月公民館に寄り合い、香華を捧げて供養している。「御仏を祭る御堂は五畳敷典の恵は里を包まん」と観音の徳を讃えて奉納し、また、「子宝を授け給わん」と悲願をこめて慈悲を仰いでいる。いつの世にも観音は女性にとって身近なものであり篤く尊信されている。

観音堂と太子堂　（大字牧沢）

観　音　堂

集落誌「牧沢」の項に述べたのであるが、天野善衛家系譜の中に「春日明神・正観世音・正(聖)徳太子」の記名がある。これは天野家の祖天野土佐頭兼国が大永七年(一五二七)猿倉の地に来住した時、鎌倉より供奉し来たったものと推定してよいであろう。

『会津正統記』には、

「猿倉観音堂人皇後花園天皇嘉吉三年会津大沼郡金山谷猿倉に観音堂を天野氏建立」

と記されている。嘉吉三年は一四四三年であるから嘉吉三年建立説は誤りと思われる。また『大沼郡誌』に、

「東川村大字牧沢字向居平に在り、宝永元年三月十七日の建立にして会式三月十七日境内地四十坪、民有地なり受持牧沢村猿沢寺」とある。宝永元年は一七〇四年であるからこの年を建立とすれば来住後一七七年後ということになり年代差があるので再建の年とも考えられよう。往昔の観音堂の位置は現在地ではなく、向居平の北方であったと推定される。それは、通称観音堂・堂の前・堂の下という地名が生じたように通称観音堂の地であったと考えられるのである。この附近には猿沢寺との関連も考えられようが経塚・道元仏の地名がある。

昭和三十五年に解体した観音堂の跡地がある。この観音堂は方三間の大きさで濡れ縁を廻らし、更に向拝も備え、石段は切石一〇〇級を数える立派なもので別名南院堂（南院とは平安宮仙洞の一つでもと藤原兼家の館であった。天野家の祖が藤原氏にゆかりのあるところからこの名を用いたものと推定される）とも称していた。また俗に善三郎観音とも称されていたが、これは天野家の祖天野善三郎兼忠（墓石がある）の名をとって呼び習わしたものであろう。

現存の本尊の台座に、

「大宮方定朝六拾三代大堀左近定勝元禄十七年甲申正月吉祥日」

の記名がある。定朝は歴史上有名な仏師であり、定勝は会津の仏師である。元禄十七年は一七〇四年で改元して宝永元年の年である。

寺院「神照寺」の項で詳述したのであるが、神照寺に現存安置されている木像坐像阿弥陀如来像の台座に右と全く同じ記名があり、宝永二年に山ノ内清左衛門信光が神照寺に寄進している。従って同年代の作であり、現存の本尊は後代のものとなるであろう。そして同年堂宇を建立したことになる。天野家が奉納したという鰐口（直径一尺）が現存する。「寛政八丙辰年七月吉日　早山房次・猿倉村」の刻名がある。寛政八年は一七九六年である。

天野家の守護として、天野家を中心に猿倉村八戸で維持管理してきた。観音信仰は深く、旧三月十七日・旧七月十七日を縁日として牧沢の婦女子が参籠し夜を明かす習わしであった。

この堂宇も幾星霜を経て荒廃甚しく、昭和三十年十二月七日観音像を猿沢寺に遷座安置したのであった。そして堂宇は昭和三十五年に取り壊され、今は夏草の中に礎石を留めている。

太子堂

この地方では大師といえば弘法大師といい習わしているが、牧沢の太子堂は聖徳太子を奉祀したものである。聖徳太子は推古天皇の摂政として時の政務を執り、十七条憲法に、

「篤く三宝を敬え、三宝とは仏法僧なり」

と定められたように仏教を尊崇擁護されたので、わが国仏教興隆の祖として崇敬されているところである。

大成沢に大師堂跡があるが、これは弘法大師を奉祀したものである。弘法大師の堂は多くみられるが、聖徳太子堂は西山地内には牧沢にあるだけである。尊像だけは久保田と西念寺に安置されている。

牧沢になぜ太子堂が建立されたのであろうか。

一説には、元中元年（一三八四）良観和尚が太子像を供奉し来たり、応氷元年（一三九四）四月二十五日に太子堂を建立し、以来四月二十五日を縁日にしたと伝えていることである（「猿沢寺」の項参照）。

第二には、前記観音堂の項に述べたように天野家系譜の中に「春日大明神・正観世音・正徳太子」と記されているところから、天野土佐頭が鎌倉から供奉したと考えられるということである（「春日神社」の項参照）。第一の説を採る場合は伝承であるということである。

第二の説を採る場合も疑問が残る。それは供奉した三体のうち春日明神と観音像は猿倉村（向居平）に奉祀されているのに、太子像は牧沢村（居平）の地に奉祀されているということである。従って太子堂の草創について本尊が同一のものか別個のものであるか判然せず解明の余地がある。太子堂が焼失したと伝えられており、その時の再建と思われる記録がある。

「陸奥会津金山谷之内牧沢村願主善衛門
奉造立大師堂　諸願成就般栄守所
干時元禄六癸酉四月大吉祥日　大工沼田佐藤藤八郎」

元禄六年（一六九三）に諸願成就を祈念して建立したのである。

『大沼郡誌』には、

「太子堂　東川村大字牧沢居平に在り、元禄六年四月廿五日の建立なり、会式四月二十五日、境内地二十坪民有地なり、受持牧沢村猿沢寺なり」

と記されており、右の記録と符合する。

現存の本尊は木彫立像、御丈九十九センチメートルの成人像で海老袖が直線であり地方作と思われ、仏師年代不明である。

村人たちは「疣神様」「疣とりの太子」として尊崇してきた。時経て堂宇の荒廃甚しく、この太子像も観音像同様昭和三十年十二月七日に猿沢寺に奉安されたのである。霊験あらたかにして「学問の神様」として聞こえ、遠く高田・新鶴・永井野方面からの参詣者があり、学問成就の祈願所となっている。

毘沙門堂（大字牧沢・鳥屋）

本尊　毘沙門天

各村には観音堂や地蔵堂が多いが、鳥屋には西山地区にない毘沙門堂が建てられた由来の詳細は不明であるが、五十嵐義信氏の祖である五十嵐越中常信は横田山ノ内俊勝に仕え横田に住していたが、天正年中に鳥屋に来住し一村の長屋となったのである。この越中常信が五十嵐家の持仏として奉安した毘沙門天を此の地に供奉したと伝えられているが、その当時の作であるかどうか不明である。

本尊の毘沙門天は四天王の一つで別名を多門天ともいう。四天王とは仏法を守護する神で天の四方にあって夫々を守護する。東方は持国天・南方は増長天・西方は広目天で北方を守護するのが多聞天

である。四天王のうち多聞天は特に優位にあり毘沙門天と尊称される。北方の守護神というところから平安時代頃から東北地方には多数安置された。悪魔を退散させる神であるから尊容は忿怒の形相をし武装している。しかし毘沙門天の信仰は守護という意味だけでなく財宝神・財福をもたらす神という信仰も加えられるようになったのである。

『大沼郡誌』に、

「東川村大字牧沢字居平に在り宝暦四年六月十日建立す、会式は六月十日境内地五十九坪民有地なり受持牧沢村猿沢寺」

と記されている。宝暦四年は一七五四年である。当堂は五十嵐義信氏宅屋敷に引続き村北に立っている。本尊は、左手に塔、右手に宝剣・甲冑をまとい邪鬼の上に立ち像高四十四センチメートル、極彩色である。守護神であるか財宝神であるか不明であるが、五十嵐家の祖が武将であったところからすれば守護神として祭ったものであろうと推考される。現在の信仰としてはその両方である。只、鎮守伊夜彦神社が村の東方にあるところから村の北方を守るためにこの地に建立されたのではないかと思われる。

堂宇は祭壇四尺に二間、外陣二間半に三間の規模で濡縁が廻され重厚である。改築されたであろうが記録なく不明である。萱葺であったが昭和四十四年にトタン張にし、会式は現在も六月十日で参籠する。

山の神や観音信仰もあり、一月十七日観音講を催すのは他と共通している。

阿　弥　陀　堂　（大字四ツ谷字下宮の原）

本尊　阿弥陀如来

集落誌「中屋敷」の項で詳述されたところであるが中屋敷は遅越渡村の端村であった。

延宝九年（天和元年）『滝谷組拾五ケ村高反別古記』に、

「端村中屋敷東西拾八間南北五十七間」

とあるところから伺い知ることができる。

遅越渡に善応寺が建立されたのは慶長十八年（一六一三）であり中屋敷は善応寺檀家であった。善応寺は浄土宗であるから中屋敷には阿弥陀堂が建立されたものと思われる。観音堂や地蔵堂は多くの集落にあるがここには阿弥陀堂しかなく、東川筋にも阿弥陀堂は中屋敷だけである。善応寺の参詣はいうまでもなく、手近に参詣する場所として小堂を営んだものであろう。内陣二尺に四尺、外陣方二間の堂宇である。『大沼郡誌』には、

「東川村大字四ツ谷字宮原に在り宝暦七年四月の建立なり境内二十一坪民有地なり会式三月十五日受持は砂子原神照寺」

と記してある。内陣に御丈二十五センチメートル、全高三十五センチメートルの阿弥陀如来像が安置されている。観音や地蔵信仰がないわけではない。御脇立として子安観音像が安置されているが勢至菩薩像はない。傍らに地蔵像と薬師如来像がある。観音信仰も深く

三月十六日お籠りをして十七日に参詣する。阿弥陀如来の信仰行事としては三月十八日にお籠りをして十九日に参詣し御詠歌をするのが習わしとなっている。

境内に如意輪観音の石像がある。像高六十五センチメートル、全高一四五センチメートル、万延元年（一八六〇）の造立である。如意輪観音は一切衆生の願望を満たし苦悩を救済する観音である。

大正初年まで直径八寸の鰐口があった。当時は無宿人が往来し、堂宇を仮宿とすることもしばしばあり行方知れずになった。村人は本尊の受難をおそれ観音像共に小島源次氏宅に後小島兵伍氏宅に遷座し暫く年月を経たが、如来のお告げにより昭和二十四年五月二十九日にお堂に奉安し現在に至ったものである。

地　蔵　堂（沢中）

村の南西を流れる渓谷の近くに栃の木があり、その傍らに造立年代不明であるが一体の石地蔵が安置され、村人に親しまれていた。大正二年の洪水の際、栃の木が倒れ石地蔵も流されたが拾いあげ、大正中期に間口九尺、奥行六尺の堂宇を建立し安置した。昭和三十七年神社改築の時、旧神社の材料を用い九尺に十二尺の堂を再建した。腫物が治るという信仰があり近村からも参詣があり、御利益をありがたく感じ香華や旗を供えている。

観　音　堂（高森）

昭和十年の火災は稀有の大火で瞬時にして集落を包み全戸を焼尽した。この時観音堂は御本尊もろ共に類焼した。村人は御本尊を避難する暇さえなかったという。焼失した堂は三間四方で御本尊は木造の子安観音であった。村人はこの法難を憂い、浄財を集め昭和十二年字居平の地に方三間の堂を再建した。棟梁は沢中村の菊地熊喜である。御本尊も右大工の彫刻になるもので一木坐像の子安観音である。御丈三十三センチメートル、全高六十センチメートルである。高森分校校舎改築に続きへき地集会所建設の時、校地拡張に伴ない字中島の現在地に移転した。講は結ばれていないが、全戸が信者で七月九日・盆の十六日にはお籠りをして供養している。

五十嵐豊氏宅は観音との結縁深くいつ時代からなのか判明しないが、正月十七日の観音参りの時は全員が五十嵐家に立ち寄りお礼参りをしている。かつて五十嵐家には観音菩薩の絵像が奉安されていたが焼失したと伝えられている。

堂宇には、一木造立像御丈三十六センチメートル、全高五十七センチメートルの薬師如来像も安置されている。焼失前の堂にも祭られていたので再建後も同様に祭ったもので右大工が彫刻した。薬師如来は病気を治し衆生の苦悩を除き給う如来である。厨子に書かれた「長命」の文字に村人の祈りがこめられている。観音には子が授り成長することを祈り、薬師には病気災難を排除して長命ならんこ

とを祈願する。これが村人の信仰である。

観　音　堂　（大字湯八木沢）

本尊　子安観世音

当村の観音堂は湯八木沢橋近くの滝谷川左岸段丘に静かなたたずまいをみせている。『大沼郡誌』に、

「中ノ川村大字湯八木沢に在り本尊子安観世音にして安政元年三月十七日の建立なり、境内地二十四坪民有地なり会式三月十七日受持は牧沢村猿沢寺なり」

と安政元年（一八五四）を建立としているが、本尊に文化十年（一八一三）の銘があるからそれより四十年前となろう。堂宇は奥行二間半、間口四間半、ほぼ中央に間仕切りがあり通常の堂宇と違った様式で一見住宅風にみえる。これは昔尼寺であったと伝えられ、左半分は尼の住居であったと言われる。約三十坪の境内には墓石と思われる碑があったと言われるがこれは当寺先亡のものという。右半分には巾三尺長さ二間の祭壇があり、通常の堂にはみられない二本の丸柱と欄間には彫刻が施され寺の様式を備えている。中央に木彫坐像、御丈四十センチメートル、全高七十五センチメートルの本尊が安置されている。

「文化十□山和尚開眼　守行門人　桧原住人　鈴木隼人」

の銘がある。古来霊験あらたかな観音として信仰者を集め地方の参詣が多い。安政七年（一八六〇）には信者によって鰐口が寄進された。

現在の鰐口は鈴木鐵一氏が四十二才の厄払いに奉納したものである。明治十一年三月には法被打敷が寄進された。当時の世話人は飯塚徳七・小島市平・同半重郎・飯塚政吉である。

明治五年学制が布かれ、湯八木沢にも学校が設けられこの堂を学校としたのである。当時は極めて小規模で男子七人程度であったと言われる。

観音信仰は篤く昭和四十九年には堂内改装工事が行われた。古来三月十六日に参篭、十七日を会式としてきたが、現在は毎月観音講を催し慈悲を仰いである。

第三節　円蔵寺　（虚空蔵尊）

虚空蔵堂

本尊　福満虚空蔵尊

脇侍　賓頭盧尊者像（本尊と同木）

日本三虚空蔵と尊敬され全国的に著名な虚空蔵尊である。いろいろな伝承がある。ここでは、文化五年編『新編会津風土記』と、天保五年の円蔵寺出版『福満虚空蔵大菩薩略縁起』によって記しておく。

これによると、虚空蔵尊は真言宗の開祖弘法大師が、延暦二十三